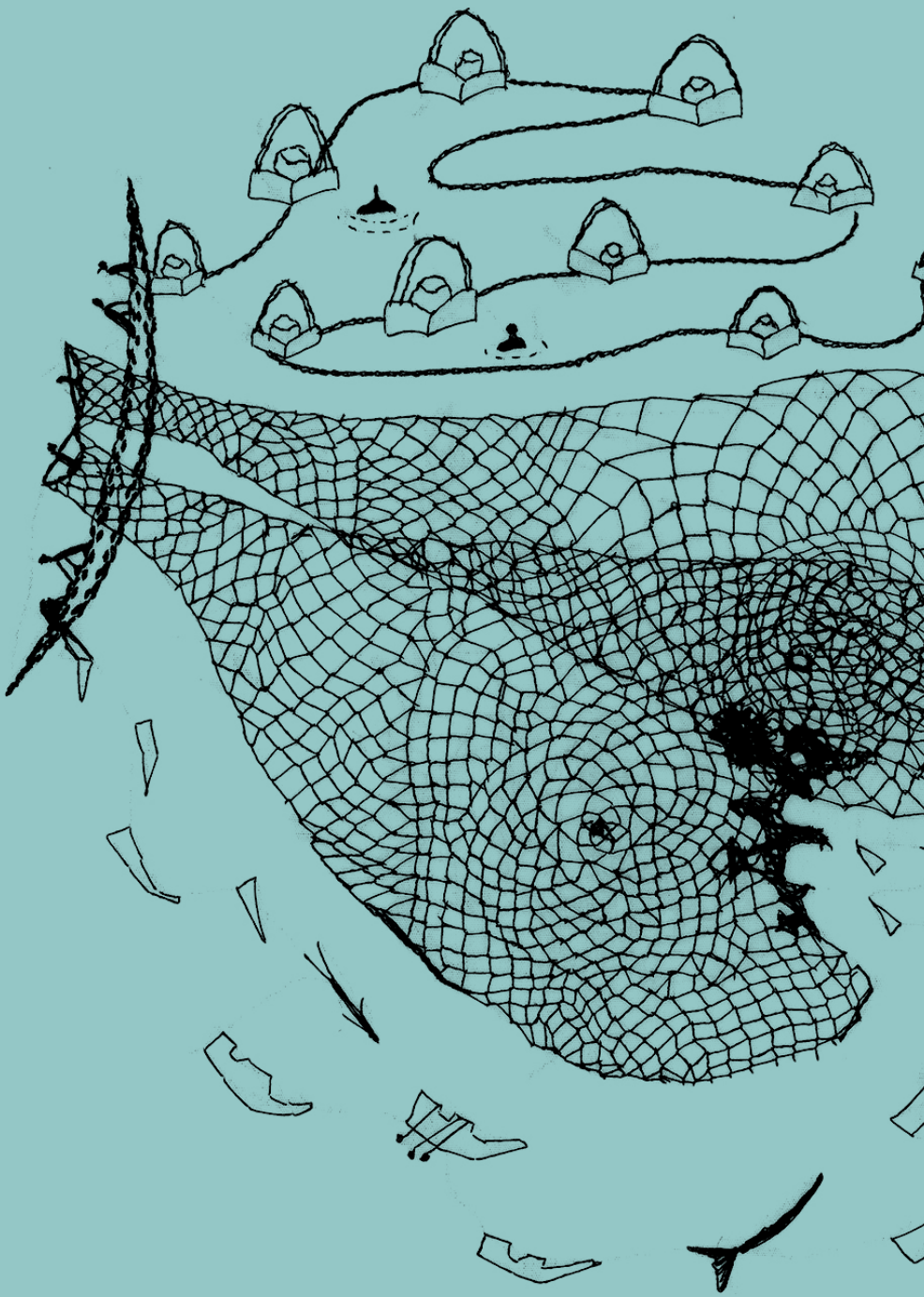
東北の風景をきく

FIELD RECORDING

特集　記録の生態系にふれる



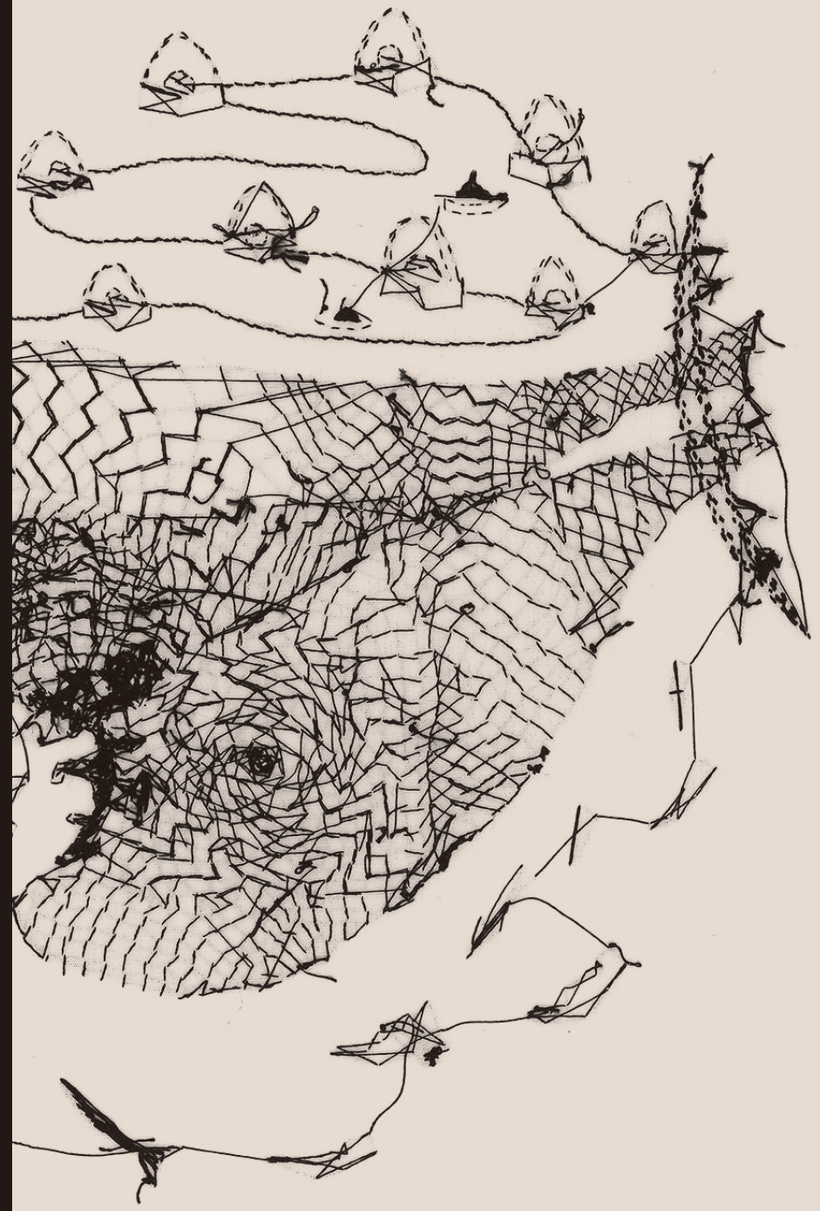
vol.
01

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

東北の風景をきく

FIELD RECORDING

特集 記録の生態系にふれる



現在の役場庁舎が建つ裏山は「城山」と呼ばれ、まちを一望することができる。写真左、建設中の建物の前にある一段低い、穴のようにくぼんだ場所は、もともとの地面の高さ。写真右、フレームから外れたすぐ横には、小鎚川水門があったが、津波はその約15mの高さを乗り越えた。
2017年8月31日〈岩手県大槌町〉
Photo by Emi Nakata





写真左には、吉里吉里海岸に続く橋が壊れたままになっている。写真右には、新しい防潮堤が建設中。中央は旧国道45号線。
2017年8月31日〈岩手県大槌町〉
Photo by Emi Nakata



防潮堤を越えて浜辺に抜けると、震災前
と変わらない、静かな海が広がっている。
2017年8月31日〈岩手県大槌町〉
Photo by Emi Nakata

東北の風景をきく

FIELD RECORDING vol.01

特集 記録の生態系にふれる

10 Interview
甲斐賢治さんにきく
過去を引きずりながら、未来をかき混ぜる

22 Conversation
一枚の写真たち 「復興カメラ」座談会

34 **途中の風景** 松本篤

38 **東北の表現**
屋根裏ハイツ「とおくはちかい」／「ラジオ下神白」

42 **大風呂敷のこと** 中﨑透

48 Diary 福島大風呂敷、制作日記2011 中﨑透

58 **わたしの東北の風景**

61 **参加者一覧**

62 **編集後記** 佐藤李青

Art Support Tohoku-Tokyo

はじめに

東日本大震災から7年目

沿岸部では大規模な造成工事が進み、徐々に家も建ち始めました。安定していく風景のなかで、震災から3年目と5年目の節目とは違い、静かに潮目が変わりつつあります。震災以前の暮らしに戻ろうとする人。離れることを決める人。震災以降に東北の地に訪れた人々も同様に暮らしのありようを変化させています。

これまでとは違う「日常」に向かう道の途中。いま、東北の地では何が起きているのだろう？

特集は「記録の生態系にふれる」

震災から5年が経った頃、東北で暮らす人たちのなかに、記憶と記録にまつわる問題意識の高まりを感じるようになりました。どのように出来事を記録し、伝わるかたちにしていけばいいのだろうか。そうした問いの切実さは、時間の経過とともに強くなっていく。そして生まれた実践の数々は、共通の関心として、日本の「近代」の経験や土地の歴史への関心と結びついているように見えます。これらの実践は、これまでのアートのありようを揺さぶる表現の萌芽のようで、それは東北という場所に群生しつつあるのかもしれない。

そこで今回は、震災を契機として、東北の地で生まれつつある「記録の生態系」を探ることにしました。

東北の風景をきく

2016年はインタビュー集『6年目の風景をきく』でともに歩みを進めてきた方々の声を手がかりに、震災以降をふりかえりました。この7年目に創刊するジャーナル『FIELD RECORDING』は変わりゆく震災後の東北のいまと、その先にふれたいと思います。

人に出会い、声と向き合い、土地の風景と出会い直す。そこから出来事を分かちもつ技術について考えたい。なぜなら、東北で起きていることは、震災の経験に限らない「わたしたち」の「平時」と地続きだから。

まずは、歩いて、その声を記録することからはじめます。

＊『6年目の風景をきく　東北に生きる人々と重ねた月日』はASTTのウェブサイト（asttr.jp）にてPDFダウンロードが可能です（郵送受付も可）。



甲斐賢治さんにきく

［せんだいメディアテーク　アーティスティック・ディレクター］

過去を引きずりながら、未来をかき混ぜる

東北のことを考えると、仙台で活動する「人」や「プロジェクト」がいくつも思い浮かぶ。それらは、せんだいメディアテークがひとつの基点となっているように見えます。震災の記録に向き合いながら、市民とアーティストと一緒に、表現や仕事が生まれる場をつくっており、話題はつきません。
震災から7年目、アーティスティック・ディレクターを務める甲斐賢治さんはいま何を考えていて、その先に何を見ているのでしょうか?

きき手―佐藤李青、嘉原妙
構成―川村庸子
写真―鈴木諒一

震災だけを見てしまったら、
それは同時に水俣を忘れているっていうことになってしまう。

――いま、どんなことを考えていらっしゃるのかおきかせいただけますか?

どこから話したらいいのかな。震災以降の状況について話すときに躊躇というか、どこか困惑するのはたぶん、震災のことだけに絡め取られたくないという気持ちがあるようなんです。『せんだいメディアテーク（以下、メディアテーク）*1』は、アートセンターとメディアセンター、コミュニティセンターなど複数の機能が期待される、文化振興よりも「学び」にウェイトを置いた仙台市の教育局管轄の生涯学習施設です。僕は教育行政のもとにアートがあることをとても気に入っています。文化振興策のようにジャンルに拘束されたり、公平性の担保を理由にことあるごとに「公募」したり、観光などの経済的指標にもさらされることが比較的少ないように思えるんですよ。つまり、基本的にはどのようなアートを扱おうが、利用者や鑑賞者に対する「学びのデザイン」が仕事だと思っています。

＊1　せんだいメディアテーク
美術や映像文化の活動拠点であると同時に、すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりを行い、使いこなせるようになることを目指す公共施設。ギャラリーやスタジオ、図書館などの機能を持ち、さまざまなプログラムを行っている。

だから、市民やアーティストも入り交じって復興の過程を記録し、アーカイブしていくという『3がつ11にちをわすれないためにセンター（以下、わすれン！）*2』という事業においても、その下地に「メディアプラクティス」という発想があって、アーティストであれ、一般の市民や学生、退職者であれ、自分から主体的にさまざまなメディアを用いて表現する場として捉えていて、要するに学習の機会なんです。で、極端に言うと「震災」もそういった活動テーマで、地域文化における数多あるトピックのひとつだとも言えないことはない。そういう態度がずっと僕のなかにあって、震災という出来事だけに焦点を当てて話すのが難しいんじゃないかと思っています。

でも同時に、実際のところは震災、というか津波や原発事故のことを「なきこと」として成り立つものなんてもはや何もないから、メディアテークがいま行っているどの事業にもそのテーマが通底しているようにも思います。そこを突き抜けたい気持ちがありつつ、それ以上にずっと引きずりたい気持ちもあります。言い換えると、震災だけを見てしまったら、それは同時に水俣を忘れているっていうことになってしまう。沖縄の米軍基地問題も、広島・長崎のこともある。原発はそれくらい長いスパンの出来事なので、そういう意味ではそれらを全部見渡していかなくちゃならない時代だったということに、ようやく気がついたんだと思います。

――そもそも甲斐さんが、2010年にメディアテークにやってきたのはなぜですか？

僕に声がかかったのは、大阪市や府の文化行政で企画やマネジメントに携わっていたことと、『remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］*3』や『recip［NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト］*4』という市民活動をしていたからだと思います。とにかく自分たちを取り巻く文化的な環境が芳しくないと思っていたので、何でも自分たちでやれる範囲でやればいいじゃないかというDIY的な考え方を仕事に持ち込んで、文化情報のフリーペーパーを編集・デザインし、自分らで撮った地域文化の映像で地元ケーブルTVの番組をつくり、美術館と組んで映像の展覧会を開くなど、手当たり次第に活動していたんです。

一般的に、アートを扱う文化施設の専門性を担保するのは学芸員資格者です。ただ、美術史や芸術学が専門であって、その多くは市民活動の経験があまりありません。なので、そのようなアートやメディアにまつわる一定の知見や専門性と、いわゆる組織化されきれない市民活動の、わいわいがやがや、ぐちゃぐちゃしたカオスのなかを泳ぐ身体を持つ、両生類のような経験を持つ人材が必要だったのでしょう。

で、実際メディアテークに来たら、日本の、あるいは仙台の文化状況のなかで、施設にせよ市民活動にせよ、みんな突き抜けようとしているところが通じ合っているように思えるんですよ。そこに一定の機会や空間を見い出し、組んずほぐれつ一緒に仕事をしようと奮闘しているのが現状です。

わすれン！や『てつがくカフェ*5』で震災に留まり、さらに『せんだい・アート・ノード・プロジェクト（以下、アートノード）*6』でメディアテークの外に出て新たなアーティストを巻き込み復興過程などへの関わりを求めたり、地域の文化活動や、民話や近代のまち並みを記録するようなアーカイブ活動も、どれもそういう現場のひとつなのです。

そういったなかでいつも思い出すのは、震災直後、普段なら躊躇して言えないのに、道ばたでうずくまっている人に「大丈夫ですか？」とたやすく声をかけることができたあの夜の寛容な感じです。信号が動いていなくても車と歩行者が互いにケアし合って交差点を渡るような状況。いわゆる「災害ユートピア」をどっぷり経験していました。ところが2週間もしないうちに、シューッと消滅してしまった。

で、その後、どうしたらあのときのそれぞれの

＊2　3がつ11にちをわすれないためにセンター
東日本大震災に対して、ともに向き合い考え、復興への長い道のりを歩きだすために2011年5月3日に開設。市民、専門家、スタッフが協働し、復旧・復興のプロセスを独自に発信、記録していくプラットフォーム。

＊3　remo
［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］
2002年に大阪で発足し、メディアを通じて「知る」「表現する」「話し合う」の3つの視点で活動。文房具としての映像の普及、小さな記録や表現の群れが持つ公共性、映像を媒介とした場づくり目指し、さまざまな研究と実践の循環が行われている。

＊4　recip
［NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト］
「文化の地産地消」を目指して2004年に大阪で発足。文化事業の企画・運営、メディア制作、文化事業やアートプロジェクトの調査・研究、文化施設の管理という4つの柱で多様な活動を行っている。

＊5　てつがくカフェ
わたしたちが日頃当たり前だと思っている事柄からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった問いを投げかけ、ゆっくりお茶を飲みながら対話を行う場。せんだいメディアテークの「考えるテーブル」事業のひとつとして震災2カ月後に始まった。

＊6　せんだい・アート・ノード・プロジェクト
「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」と、地域の「人材、資源、課題」をつなぐアートプロジェクト。2016年に発足し、せんだいメディアテークが運営。アーティストが東北をリサーチし、同時代性のある作品を制作。調査、企画、制作、発表までの過程を人々と共有し、鑑賞に留まらない活動への接点をつくることで「アートの現場」をつくることを目指す。

持つわずかな「自治する力」を維持しながらこの先へと進んでいくことができるかが、僕らの課題なんじゃないかと考えているんです。お客さん意識がクレーマーを生み、行政も市場もどんどんそれに対応するコストもストレスも増えていく状況で、どのように「お客さんではない人たち」と出会うことができるのか。それは、どこか「新しさ」を持つ文化を、切実に必要とする地域の人たちと協働してつくることが肝なんじゃないかと思うんです。そのとき「新しさ」を考えていくために、アーカイブという取り組みを通じて、過去をふりかえりながら前へと進んでいくのがその土地の固有性を考える上でも大切なんです。これも、わすれン！をはじめてあらためてしっかりと気づかされたことでした。

　正直なところ、津波にせよ原発事故にせよ、これまで僕らは過去をきちんと顧みてこなかった。それに、歴史の教科書で学んだことの延長にいま自分がいる、などという自覚をみんな持つことができているとは、どうも僕には思えない。

　なので、いま僕は「歴史」という言葉を使わず、「昔のこと」と置き換えるようにしています。「歴史」という言葉を使った時点で既に何かが危うくなって、自分たちの現在と地続きではなくなるように思える。何がそうさせているのかはわからないけれど、どこかしら「前だけ見ろ、うしろを見るな」と耳元で囁かれているような気さえして、挙げ句の果てには「未来」という言葉もできるだけ使いたくない気分になりつつあります。

　とにかく、そういったなかあらためて、それぞれが「昔のこと」をふりかえりながらも前へと進んでいく、各自勝手に地域固有の新しい文化づくりに邁進すべきだと思っているわけです。もしかして僕の考え方だと、アートも大事だけれど、自分たちの自治する力をつけるためにアートを必要としていると言ったほうがいいのかもしれませんね。

それぞれが「昔のこと」をふりかえりながらも前へと進んでいく、各自勝手に地域固有の新しい文化づくりに邁進すべきだと思っているわけです。

――そうした自治する力をつけるにあたって考えているのは、どんなことですか？

　そうですね、僕の立場だと「協働」のかたちをどう探るかだと思っています。僕は「ＮＰＯでやる」というのは、「清き一票」で自分たちの環境を能力のある誰かに委ね、変えようとするのとはまた別の手段だと思っています。自ら仲間を集め、ＮＰＯ法人という社会的な人格を確保し、積極的に政策を理解することに努め、公金による公益事業を通じて、たとえ小規模であっても経済活動をしながら自らが属する環境を、地域社会を変えていく。それは「直接的な政治活動」だと考えてきました。

　ところが、結局のところ国の制度としても、そういった非営利活動に対して寄付税制などの優遇措置は非常に消極的で、制度的にまったく整っていない。１９９８年に特定非営利活動促進法が施行されてからまもなく20年になりますが、特にアートの現場は厳しい状況のままのように思います。

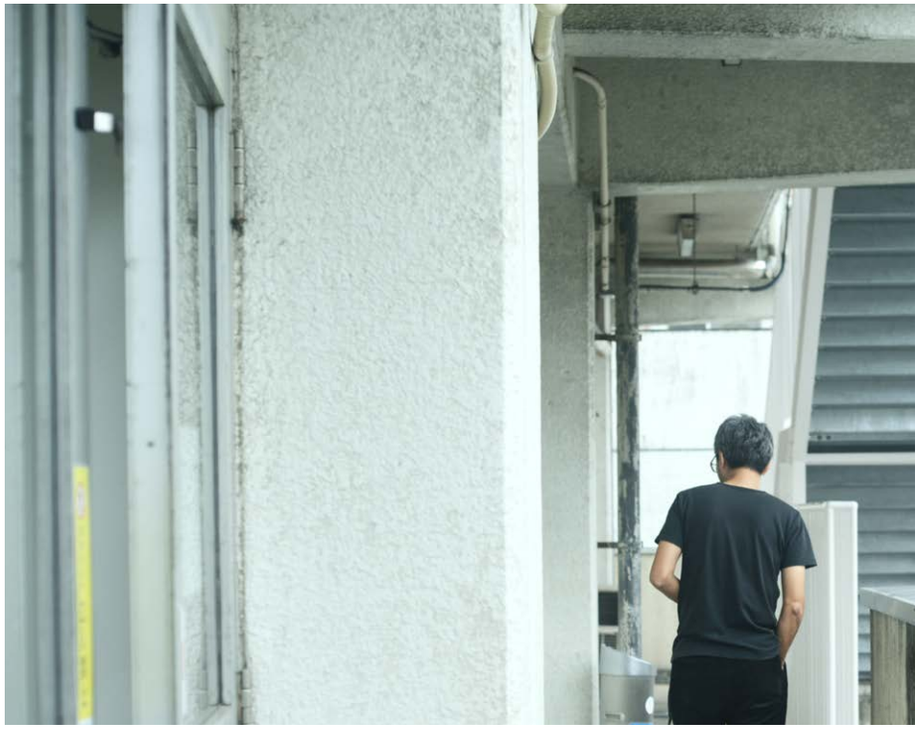
　さらに最も危ういのは、各地のアートプロジェクトや芸術祭において、ＮＰＯなどの非営利活動が少なからず与（くみ）したようにも思えるのですが、ほとんどどこにも記述されず、さほど語られないままに時間が過ぎようとしていることかもしれま

「ハーイ」って挨拶したら、「ハーイ」って答えるのが市場の倫理。ところがガードマンに「ハーイ」って言っても返事は返ってこない。でもそれはそれで管理する立場の仕事のふるまいとして正しいと言うことは理解できる。つまり、市場と統治、相反するふたつの倫理があると。なるほど、それを行き来することが僕らのような者の仕事なんだなと。そりゃ立場が違えばそうなりますよね。多くの人がそうであるように、人は仕事を通じ、さまざまに経験し、学びます。そのとき一定の「公共性」を学ぶことができる機会を施策のなかでつくっていきたい。それが地域の自治する力を育むのではないかと思うんです。要は、社会起業家もそうだけど、社会に良いと思うことを仕事化して、生計を立てる。そういう考え方でいいと思う。だから、地域での文化的な生態系を醸成するような施策にとても関心があります。

そう考えると、公共事業としてアートは最適なんですよ。そもそもアートの社会的価値は理解も評価もされにくい。だからこそ、関わる人たちにせん。言い換えると、それ以前にはまったく制度化されなかったオルタナティブな活動が法律に基づいた人格を持ち、質の程度に差はあれ、各地の状況を底支えしてきたことがきちんと残されていないということです。これは、NPO側にもおおいに問題があると思いますが、同時に、批評が作品や作家の評価のみに目を向け、文化的な生態系や環境の整備という、より現実的な課題にコミットしてこなかったことが理由なのではないかとも思います。

とはいえ、政策を通して、さまざまな組織と仕事をともにしながら、環境づくりをしていくことが大切であることは変わりありません。たとえ小さくとも地域経済を踏まえた仕事なくしては継続していかないでしょう。

都市論の第一人者ジェイン・ジェイコブズの『市場の倫理 統治の倫理』という僕にとってバイブルのひとつがあるのですが、そこには倫理にはふたつあると書かれています。簡単にいうと、アメリカの本だからだけど、まちなかで人に会って





はそれぞれの現場において、公金を用いる根拠を説明する責任が発生する。そこに、「公共性」を市民自らが高めていく機会が散りばめられているように思います。もちろん、アートが本来持っている驚きというか、社会システムへのカウンター的な機能をしっかりと社会に対峙させ、適応させていくようなことでないと、そんなふたつの倫理に挟まれることなんてないでしょうけど。

欧州諸国のように民間から始まったアートにまつわる諸活動や機関に、運営費も含めて助成するような施策の進め方が、一定のダイナミズムを生む方法なのではないかと思うんですよね。以前、オランダのアートセンターが予算カットの決定を受け、抗議のデモが起こりました。確か市庁舎をゴールにまちなかを練り歩いたのですが、そのデモ参加者の多くが施設利用者で、その先頭には施設のディレクターが立っていた。行政指導ではない、本来こういうありようが文化にとっては相応しいような気がするんです。

僕自身の出自としても、大阪市が進めた文化政策のひとつで大阪西成にあった屋内型遊園地『フェスティバルゲート*7』を拠点とする「新世界アーツパーク事業」なくしては得られなかった経験がたくさんあります。

この事業自体は当初10年の計画において、5年で頓挫しましたが、企画立案、運営にまつわる諸権限を民間のアートNPOにかなりの割合で委譲するかたちで進められました。結果、大阪西成の上田假奈代さんのココルーム（こえとことばとこころの部屋）*8や雨森信さんのBreaker Project*9、神戸の大谷燠（いく）さん率いるDANCE BOX*10や、さらに、アーティストならば梅田哲也*11さんやcontact Gonzo*12、ほか日本中を動き回っているアサダワタル*13さんや、現在関西の重要な場に必ずいると言ってもいい音響・音楽家の西川文章*14さん、さらには、その後、此花や北加賀屋地区などへも動きが飛び火するなど一定以上の人材を生み、いまもそれは続いています。

当時僕は、フェスティバルゲートの入居団体の

＊7　フェスティバルゲート
浪速区にあった都市型遊園地を含む商業施設。その空き店舗スペースを指定管理者ではなく、大阪市芸術文化アクションプランの一環として、家賃と水光熱費を行政が持ち、NPOが自主的に事業を展開する公設置民営方式をとった（新世界アーツパーク事業）。2002年から10年計画の構想だったが、途中で市の文化政策が変更され、2007年に建物が閉鎖。remo、DANCE BOX、ココルームなどのNPOが参加していた。

＊8　ココルーム（こえとことばとこころの部屋）
2003年、大阪の新世界で喫茶店のふりからはじまった「表現とであいの場」。2008年、西成・釜ヶ崎に拠点を移し、「釜ヶ崎芸術大学」や「まちかど保健室」などをひらき、ゲストハウスを運営。「生きることは表現」と捉え、さまざまな人たちが出会い、悩みも喧嘩も笑いもありのままに「日々人生劇場」が繰り広げられている。

＊9　Breaker Project
2003年より大阪市の文化事業としてスタート。芸術と社会をつないでいくことを目的とし、表現者と鑑賞者双方にとって有効な創造活動の現場をまちの中に開拓していく地域

いますぐ成果に結びつかなくても、とにかく小石を積んでいかないと道が拓かれない。一つひとつは80点取る場合もあるし、30点の場合もある。

ひとつであったremoに関わりながら、この事業全体を受け持つ事務局にも籍を置いており、事業として撤退する顛末（てんまつ）とともに、課題、成果、費用対効果など、その仕組みの可能性と限界をそれなりに把握しています。いまふりかえっても、とても実験的ながらも有効な事業だったと思いますね。

――なるほど、大阪での経験がいまの活動につながっているのですね。

日頃、活動をするなかで、大事にしていることは何ですか？

評価を棚上げにしていることですかね。だってこんなにアートやアートプロジェクトが広がるなんて思ってもなかったですよね。ひとまずそれが広く一般に認知されてきただけでも意味があるから、現場のノウハウを蓄積するためにはいったん評価を保留にする必要があると考えてきました。

どうしても最終的なアウトプットで質を測られてしまうけれど、僕にしたら小石を積んでいる感じなんですよ。いますぐ成果に結びつかなくても、とにかく小石を積んでいかないと道が拓かれない。一つひとつは80点取る場合もあるし、30点

密着型アートプロジェクト。芸術表現活動を生活に取り戻すことで、芸術・文化の裾野の拡大を図ると同時に、市民一人ひとりが多様な価値観を獲得し、それぞれの想像力、創造力を育み、成熟した市民社会が形成されていくことを目指している。

＊10　DANCE BOX
ダンスの「自己表現の力」「コミュニケーションを創る力」「国際性」を現代社会に活かし、市民がより豊かな生活を享受できる環境づくりを目指す。舞台芸術を「つくる」「上演する」「出会って何か始まる」現場がいつも興っているような状況になるよう、劇場運営やレジデンスプログラムも行っている。

＊11　梅田哲也
1980年熊本生まれ、大阪在住。時間と空間を基調とし、建築構造や人々のふるまいを含む状況そのものを素材とした体験型のインスタレーションを展開。日用品や廃材など身近なものを素材に使いながら、都市空間や自然のなかでサイトスペシフィックな作品も手掛ける。国内外の展覧会や芸術祭、パフォーミング・アーツや音楽のフェスティバル、ライブなどさまざまな場で活動している。

の場合もある。それでも前を向く。そんな感じです。

アートにまつわるあれこれをいろいろ疑いまくって、一周して自分で自分の考えてることをもまた疑ってるので、もう何が本当かわからない。でも、とりあえずこれかなって思ったことを小石を積むようにしかできないなと思うんです。

そう言いながらも、アートノードを始めて約1年半ですが、仙台市のさまざまな施策にアーティストをマッチングする方法が自然と発生してきました。

パリ在住のアーティスト・川俣正[*15]さんとは沿岸部の被災地域に横たわる貞山（ていざん）運河で、地域の人々の要望で、津波で流された橋を再建する事業に取り組んでいます。あいにく「橋」という公共財は河川法などさまざまな規制が多く一筋縄には行かず、建設には数年という時間を要しますが、担当部局との連動で実現に向かう道筋がようやく立ちました。また、環境局には家庭ゴミのなかにあるリサイクル資源の割合を減らしたいという課題があり、アーティストの藤浩志[*16]さんとの事業もはじまっています。さらに、アーティストユニットのKOSUGE1－16（いちのじゅうろく）[*17]を軸に、タノタイガ[*18]さんなどの力も借りて、大正から昭和初期に仙台で行われた児童文化運動の掘り起こしに取り組んでいます。これも仙台文学館など、さまざまな公共施設や施策との接点を持ちます。

市民自らが状況づくりに参加し、価値を判断し、公共と民間が双方に一歩踏み出してつくり出す、少し危ういかも知れない「公共圏」を一時的でもいいから確保していく。

こうして市の政策や課題に少し介入して、アーティストと各部局を行き来するように動くことで、アートの取り組みが、内部の縦割りへの「少しやっかいな横串」になることに可能性を見い出しつつあります。

市民自らが状況づくりに参加し、価値を判断し、公共と民間が双方に一歩踏み出してつくり出す、少し危ういかも知れない「公共圏」を一時的でもいいから確保していく。そして、アートあるいはアーティストが持つ、固まってしまった既存の考えや関係をほぐすような、異物としてのふるまいを最大限活かした学びの機会をつくりたい。そんな思いがいくつも重なって、いま、アートノードを中心にさまざまな事業を展開しています。

もしかすると、メディアテークは、まちの品格をあらわすようなシンボルを目指すのではなく、固有の視点や技術を持って内外からやってくるアーティストと地域のパートナーとともに、公金というガソリンをエンジンに流し込み、過去を引きずりながらまちを疾走し、あたりを巻き込んで明日をかき混ぜる、攪拌（かくはん）機のようにありたいのかもしれません。

と、そんなことを夢想するなか、もはやお手本はどこにもないようにも思うのです。

2017年9月27日
ROOM302（3331 Arts Chiyoda）にて

甲斐賢治｜
せんだいメディアテーク
アーティスティック・ディレクター
1963年大阪生まれ。remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］とrecip［NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト］、NPO法人アートNPOリンク、NPO法人芸術生活研究所hanareなどに参加し、社会活動としてのアートに取り組む。2010年より、せんだいメディアテーク所属。平成23年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

＊12　contactGonzo
2006年にダンサーの塚原悠也と垣尾優により結成。集団名であり、彼らの追求する方法論の名称。肉体の衝突を起点とした独自の方法論を構築し、即興的なパフォーマンスや映像、写真作品を制作している。セゾン文化財団助成対象アーティスト。トヨタコレオグラフィーアワード2014ファイナリスト（塚原悠也）。

＊13　アサダワタル
P.61参照

＊14　西川文章
1975年生まれ。音楽家、サウンドエンジニア。1996年より音楽活動を本格的に開始。2004年より維新派の音楽監督等で知られている内橋和久を中心としたメンバー等と共に、オルタナティブスペース「BRIDGE」を運営し、音響を担当（～2008年）。専門学校ESPエンターテイメント音響講師。

＊15　川俣正
1953年北海道生まれ。パリ国立高等芸術学院教授。建築や都市計画、歴史学や社会学、日常のコミュニケーション、あるいは医療にまで及ぶ分野と関わり、既存の美術表現の枠組みを超えていく試みを実践している。

＊16　藤浩志
1960年鹿児島生まれ。木造家屋の廃材から101匹のヤセ犬をつくる「ヤセ犬の散歩」、いらなくなったおもちゃで子どもの遊び場をつくる「かえっこ」、かえっこを使った防災プログラム「イザ！カエルキャラバン！」など不要となった素材を活用して地域に新しい活動をつくり出す美術作家。秋田公立美術大学大学院教授・副学長、NPO法人プラスアーツ副理事長、株式会社藤スタジオ代表。

＊17　KOSUGE1－16
2001年、車田智志乃（くるまだ・ちしの）、土谷享（たかし）によるアーティストユニットとして活動開始。日常のありふれた環境や、現象、人のつながりをきっかけに制作。作品を介在させることで鑑賞者を参加者として変質させ、参加者同士、あるいは作品と参加者のあいだに「もちつもたれつ」という関係性を構築する。

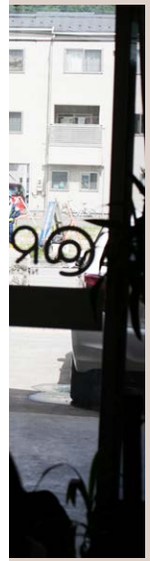
＊18　タノタイガ
東京生まれ、仙台育ち。美術家。立体造形、映像、パフォーマンスなど多様な表現手法によって、社会制度やルールや法律などの記号性と媒体性を誇張した風刺的表現を行う。ときには作者自身を媒体とすることもある。





一枚の写真たち

「復興カメラ」座談会



東日本大震災の被災と復興の経験を伝える『復興カメラ*』。岩手県釜石市と大槌(おおつち)町を中心に、日々刻々と変化し続けるまちの様子や、地域行事、人々の暮らしぶりなどを「今日のこの景色は今日しか見ることができない」と写真に撮り続けています。今回、特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター(以下、リアス)の川原康信さん(写真左)と一兜育恵さん(写真中央)、常陸奈緒子さん(写真右)に、記録を続けてきたいまの気持ちを伺いました。震災7年目、撮影した枚数は155,182枚に及びます。



きき手｜佐藤李青、嘉原妙
構成｜川村庸子
写真｜仲田絵美

2018年3月11日に向けて

――復興カメラはどうやってはじまったのですか?

川原　もともとわたしたちは商店街活性化を目的にまちづくりをしていたNPOですが、震災後は緊急支援物資の輸送など復興支援活動をすることになったんです。そこで2011年7月に神戸がどうやって復興したかを勉強しに行きました。そのとき『人と防災未来センター』で写真の展示や資料を見て、「これをあとからやろうと思ってもできないよ」とアドバイスをもらって、よし、いまの状況を残そうと思い立ちました。そして帰ってきてから、どうしようかと考えていたときに、同じ商店街の写真屋の菊池賢一さんが写真で記録をするのはどうかと提案してくれたんです。最初は11人ではじめて、だんだん「瓦礫でパネルをつくって写真展をしてもいいかもしれない」とか「復興カメラって名前はどうかなあ?」という感じで、活動が生まれていきました。

一兜　そうそう、賢さんが名づけた「復興カメラ」っていう名前もよ





＊　**復興カメラ**
@リアスNPOサポートセンターのスタッフを中心に、震災以降の写真(動画も有)を記録に残す活動。記録は、ホームページやFacebookで公開している。写真をパネルにし、各地で写真展も開催。パネルの数は657点、写真展の開催数は22回、来場者数は24,320名に及ぶ(2017年9月現在)。
http://kickoff-rias.com/fukkocamera

いまは気が向いたら撮影に行っています。

川原　一時期、造成工事で風景に大きな変化がなくて、あまり撮らなかった時期がありましたが、最近また急激に変わり出しました。撮る時期と撮らない時期がありますね。

一兜　途中途中でどうしていったらいいかって話し合ってきてるんですよ。テーマを決めてやったときもあった。でも悩みながらもよくここまで続いたなって。

まだ何が終わりかを全然考えられていないけど、ちょっとそろそろどっかで一回区切りをつけたい感じがありますね。

川原　ほんとよくやってるよね。ただ、まだ何が終わりかを全然考えられていないけど、ちょっとそろそろどっかで一回区切りをつけたい感じがありますね。復興どうこうじゃなくて、こっち側だけの区切りとして。それで辞めてもいいし、また新しく進んでもいい。

一兜　うん、区切りっていうか、何だろうね。これからどうやっていけばいいのか考えたいというか。いろんなことがいっぱいありすぎて、これでよかったのかどうかいまもまだ迷っているんです。

常陸　震災から5年目のときに、写真集にまとめようとはしたんですよ。でも、いろいろな兼ね合いがあって、販売が難しくて止まってしまって…。

かったから、すぐ「おお」ってなったんだよね。20代前半の若い子たちのチームで、彼女たちからすれば遊ぶところもなくなって、楽しみもなくなっちゃったしちょうどよかった。賢さんは「いつもカメラを背負って歩きなさい」「撮りたいと思ったらすぐ撮ってね」って言ってましたね。最初の頃はイベントとか、何かある度に撮りに行ってたんだけど、だんだんスタッフもNPOを卒業して人が少なくなってきて、

一兜　そう、写真集にまとめられたらいいよねという話はよく出るんだよね。釜石や大槌で写真展をやるのは、地元の人の気持ちもあるからちょっと難しくて、そのぶん写真集っていうかたちで伝えられるんじゃないかと思って。

川原　地元でも何度か写真展はやってみたんだけれど、2012年のお盆に初めてやったときはすごく怖くて、やっぱり何か言われるんじゃないかと思っていたら、地元のおじいさんたちが孫みたいな子を連れて来て、一生懸命説明してるんですよ。そのときは、ああ、何か役に立ってるんだなって思ったけど、見たくもないってピュッて出て行ってしまう人もいるので、どっちもどっちかな。

一兜　そんなこともあったね。東京から帰省してた老夫婦が、「もしかしたらこれが家の最後だからこの一枚だけ欲しい」って、ずっと見てたこともありました。

常陸　やっぱり釜石の外に出た人は、自分の知ってる場所が写ってるかもしれないっていう期待を持って来るんですよね。たとえば、撮影地って曖昧だったりするんですが、嬉石（うれいし）出身の人にとっては、そこが嬉石町なのか隣の松原なのか重要なんですよね。写真展のパネルを見て、「これは嬉石ですよね？ 松原じゃないですよね？」って、キャプションの撮影地について細かく質問されることもありました。怒ってるわけじゃなくて、すごく確かめたいって感じで。

最初は、普通にぱあって見ていて、気づいたら一枚の写真の前でずっと止まってるんですよ。人が写っている写真だと、まじまじ見て泣いたりする人もいるんですけど、そういう写真でもないし、どうしたのかなと思ってちょっと目を合わせにいったら、スイッチが入った様子で「あのう」って話かけられたんです。

そのことがあってから、状況説明だけじゃなくて、撮影地も見る人にとってはすごく大事な情報なんだなって。

川原　ここの出身じゃない人たちは、松原・嬉石地区ってくっつけて言うんだよね。でも地元の人にしてみればね。

常陸　ほかにも「ここにわたしの実家が写っててね」と自分から説明

を始める人がいて、この写真がなければそういう話をすることもなかったであろう人が語ることにつながるっていうのは、何か果たしている役割があるんじゃないかと思えましたね。

川原　Facebookで毎月11日に写真を上げると、必ず１００人、多いと２００人以上の人からのいいね！があるから、まだまだ気にかけてもらえてるんだなって思う。だから、２０１８年の3月11日には、お世話になった人への報告も兼ねて、何かつくって一区切りつけたいんですよね。

一枚の写真

――どんな写真があるのか、思い出深いものについて教えてもらってもいいですか？

一兜　わたしは大槌出身なのですが、大槌は「一年のはじまりが祭り」っていうぐらい9月の祭りが盛ん。町中をフルマラソンより歩く祭りがあるんですが、震災の年は神社の周りしか歩けなかったんです。被災した人ばっかりだし、家族を亡くした人ばかりだから。それでも、いろいろあったけどみんなでやろうと。神輿を担いでいる氏子の半分はみんな家族を亡くした人たちで、亡くなった人たちにも見せようと一生懸命担いでて。本当にいろんな人が来て、とてもよかった。

こっちは被災した港で賢さんが撮った漁師さんの写真です。しかも話してたら「なんだ、お母さんと同級生じゃん！」っていうのがわかって、こうやって笑いながら写ってくれたそう。一生懸命漁の道具を直していて、せつなかったけどおもしろかったって言っていました。

川原　２０１１年の11月に東京で写真展をしたときに、賢ちゃんと何人かで行ってこの写真の説明をしたんだけど、そしたら本人泣くわ、見てる人泣くわでみんな大変だったみたい。「号泣号泣でもう大変よ」って言ってたね。

一兜　これは（P.28）防潮堤が建って、旧国道45号線が真ん中にあるんだけど、新しいまちが防波堤の向こう側にできていくのがわかる写真です。左側は海岸に通じる橋で、被災したときのまま。ここは何て言う



2011年9月25日〈大槌町上町〉　Photo by Ikue Hitotsukabuto



2011年8月〈釜石市両石町〉　Photo by Kenichi Kikuchi



2016年2月5日〈大槌町吉里吉里〉

Photo by Ikue Hitotsukabuto

か、いまと昔とこれからを全部感じられて、ぐっとくる場所ですね。

川原　道路がなくなるからもうここには来られないねっていう話をしてたけど、まだかろうじて行けるよね。

一兜　橋がどうなっていくのかわからないから、下のもともとの道路を歩けるのはもういましかないっていう感じ。高い壁に覆われて、その上に新しいまちができていくと思うと、ちょっと何か寂しいようなよかったような、何とも言えない気持ちになります。

川原　でも、防潮堤を抜けて、浜に行って海のほうを見るとスカッとする。

一兜　そうそう、全然変わってないからほっとする。吉里吉里や浪板（なみいた）海岸は、必ず高校のときにみんなチャリで泳ぎに行ったんだよね。

常陸　わたしはもともと釜石出身ですがずっと外に出ていて、震災のときも長野にいて、ちょうど長野から釜石に帰ろうと移動していた途中で震災が起きたんです。それでようやく東京に出たんだけれど陸路も空路も駄目で、新幹線で大阪へ行って伊丹から花巻に飛んで帰って来ました。それが3月19日か20日のこと。実家は被災しなかったんですが、どうなってるのか気になって出掛けて行って、何かを撮ろうと思って撮ったっていうよりは、ちょうどそのときに買ったばっかりのカメラを持っていて、なんだか撮らなきゃいけないような気がしてちょっと遠慮しながら撮ったんです。そのあと2013年の8月にリアスに入って復興カメラのことを知って、そういえばわたしも写真を撮ったなと思って見せたら、「じゃあ、ここがいまどうなっているか定点観測しよう」って言ってくれて。わたしはちょうど震災直後から2年間海外に出ていたので、まちが変わっていく様子を見てなくて、帰って来たら綺麗になってた。だから、こういう写真を見て、前はこうだったなって思い出したり、こういうふうに変わってきたんだっていうのを知ったりしてるんです。

一兜　昔はこの写真（P.31）の場所には桜の木がこうぶわっとあったんですけど。だんだんなくなっちゃって。

常陸　別にお花見するスペースも

ないし、あまり目立たないんですけど、すごく綺麗な桜が咲くところだったんですよね。津波もある程度かぶっていたはずだけど、毎年ちゃんと咲いてた。でもどんどん嵩上げをして道路の切り替えが進んで。もともとあった道路が嵩上げで地面の下になってっちゃうのが、仕方ないけど、ちょっとなんとも言えない感じがあって。

川原　もうこの場所から撮れない？

常陸　嵩が変わった感じはあるけど、まだ大丈夫ですね。

川原　わたしは、震災当日にセミナーを開催していたのですが、そこに来てくれた先生がたまたま撮ってくれた『旧釜石保育園』の避難写真（P.32）です。これを見たのは、震災3年後くらいでした。

一兜　何かの話であのときあの先生たちが釜石にいたんだよねっていう話をしてて、あの人たちだったら絶対写真を撮ってるんじゃないかと思って、川原さんに連絡を取ってもらったんです。

川原　そうしたら「あるよ」ってこの写真が送られてきた。わたしの嫁さんや床屋のおばさんが写っていて、よくよく見ると園の先生たちの服装がすごく寒そうなんですよ。3月だっていうのに普通のジャンパーしか着ていない人もいて、すぐに帰るつもりだったんじゃないかって。子供には気を使って上着は着せてるんですけど、パジャマのままの子もいてちょっと慌てた感じがあったり、たぶん子供たちのものだと思うんだけど、靴を袋に入れて持ってたりとか。このあと津波がきたことを知ってるから、よくこんな写真を撮ってたなって。わたしらのすべては、ここからはじまったなって思う。

わたしらのすべては、ここからはじまったなって思う。

——ここからはじまったというのは、どういう感じなんですか？


1


2


3


4

1. 2011年10月3日
2. 2014年12月17日
3. 2015年7月16日
4. 2016年1月22日
〈釜石市嬉石町〉

Photo by
1. Satsuki Furukawa
2.3.4. Naoko Hitachi



川原　やっぱり3月11日の震災がなければ、誰とも知り合わなかったから。たぶん普通に平穏な生活をしてたはずで、いろんな人といろんなものをなくしたけど、いまはいろんなものも得たと思うような時期になっている。

ここからとにかくはじまったっていうのは、この写真を見たとき最初の印象です。ここからこういう記録や復興支援の活動もはじまったんだなって。

――もし写真に写っている人たちにこの写真を見てもらうことができたら、何をきいてみたいですか？

川原　このときどう思っていたかということですね。単純に、何で上着を着てなかったのって。すぐ帰れると思ってたんじゃないかっていうのは、わたしの想像だから。

一兜　そういえば、わたしも上着着て逃げてなかったな。

川原　俺は着てたぞ。

一兜　すぐ職場に帰るつもりだったなと思い出しました。この通りはこんな感じだったなとか。全部そうですけど、この一枚からもいろんな人のいろんな話を思い出しますね。これを撮ったのは新潟のＮＰＯの人で、セミナーに来てなければ被災もしてないし、一番手前の子たちはもう成長してこのあいだ小学校に入学したし、すごい一枚だなと思う。

川原　でも、この写真を園の先生方に見せたら、そのときのことをいいほうに思い出してくれればいいんですけど、悪いほうに思い出しちゃったらと思うと、それがちょっと不安ですね。だからなかなか言いづらい。

一兜　あれから若い新しい先生も入って来たから、（この写真を使えば）これからまたこういうことが起きたときにこうするといいんじゃないかとか、そんな話も出てくるんじゃないかなっていう思いもありますね。

川原　この一枚だけで、20人ぐらいの先生がいるもんね。その一人ひとりにきくだけでもすごい物語があるんだろうな。

2017年8月31日
みんなの家かだって（岩手県釜石市）にて

途中の風景

松本篤

震災からの復興の過程を住民みずから記録する活動に、2年前から関わっている。岩手県釜石市・大槌町での「記録に残す」試みは、筆者が別の場所で並行して取り組んでいるいくつかの試みと響き合っている。いまここの風景は、いつかどこかの風景とつながっている。それぞれの“あの日”のあとを追う試みの、そのあとを追う。



1.

2013年の秋、兵庫県西脇市に暮らす祖父が寝たきりになった。祖父を見舞いに大阪から帰省しては、祖父と同居する祖母に昔の話を聞いて記録に残していた。幼少時に川の対岸から見えた掘っ建て小屋の自宅。戦争中の学徒動員。祖父との馴れ初め。私の母を産んだこと。母が私を産んだこと。ただ、祖母の話は、毎回同じ場面で中断し、そして再び最初に戻り、同じ語りをなぞり始める。またか。音飛びするレコードのように、祖母は規則正しく壊れる。

1年後、祖父が亡くなった。翌年の初盆、実家で祖母の話を聞いていた。その時だけは祖母の語りは繰り返されず、これまで聞いたこともないエピソードを教えてくれた。実は祖父と出会う前に、文通していた意中の男性がいたらしい。はじめて聞く話にその場にいた両親は面食らい、私も不意をつかれて言葉を失った。そんな話を聞いたのは、後にも先にもあの日だけだった。

祖父が死んで“たが”が外れ、長い間心の奥にしまっておいたことが無意識に顕れてしまったのではないか。しばらくしてふとそう思えてきて、実家に電話をかけた。交互に電話口に立った両親は、口を揃えて言った。そんなことあったっけ。父も母も一緒になって祖母の話を聞いていたのに、当日の出来事はまったく憶えていなかった。唖然としてICレコーダーを聞き直すと、電池が切れて肝心の部分が録音できていなかった。こんなことが本当に起こるのか。間もなく祖母は体調を崩し、祖父のあとを追うようにその秋に死んだ。

2.

祖母が亡くなった2015年11月、東京の吉祥寺で川端康成の『十六歳の日記』を読み直していた。翌年に開催される展覧会の準備のためだった。その日記は、早くに両親を亡くした川端が、唯一の肉親だった寝たきりの祖父の最期を写したものだ。川端少年は「日記が100枚になれば祖父は助かる」という思いから原稿用紙100枚を用意し、盲目の祖父の臨終直前の様子を凄然と切りとっている。

この日記の面白さの1つに、出版された経緯の複雑さが挙げられる。川端が執筆したのは数え年で16歳の時。その10年後、川端が27歳の時に親戚の蔵に眠っていた原稿を偶然発見し、本文への補足やあとがきを加えて上梓した（1925年）。あとがきには、「私がこの日記を発見した時に、最も不思議に感じたのは、ここに書かれた日々のやうな生活を、私が微塵も記憶してゐないといふことだつた。これらの日々は何処へ行つたのだ。どこへ消えたのだ。私は人間が過去の中へ失つて行くものに就いて考へた」とある。

話には続きがある。後年、日記の続きの断片が新たに発見され、川端が全集を編纂する際にその部分が本文に追記されたのだ（1948年）。おまけに「あとがき」のあとに、あとがきの内容を補強する「あとがき二」も収録された（1959年）。あの日の日記に、時を隔ててあとがきが重ねられ、さらに時を経てさらなる日記とあとがきがそれぞれに重ねられた。川端はあとがき二に、27歳の自分が「これらの日々は何処に行つたのだ」とあとがきに記した事実に触れながら、いまもって「過去に経験したが記憶してゐないという不思議は、五十歳の現在も私には不思議」だと書いている。

3.

祖父が亡くなる数ヶ月前の2014年8月、岐阜県大垣市の図書館で、「40年前の『慰問文集』を再発行」という見出しの新聞記事に目が留まった（毎日新聞岐阜版／1979年8月14日掲載）。慰問文とは、戦時下の前線で戦う兵士を鼓舞・慰労するために内地の人間が書いた手紙の総称である。日中戦争が始まって2年後の1939（昭和14）年6月、岐阜県の旧伊深尋常小学校の児童が、中国で戦う伊深

出身の“兵隊さん”に慰問文を送った。その慰問文集が40年ぶりに再発行されたのだ。

当時、尋常小学校4年生だった男子児童の慰問文の一部を紹介する。「〈略〉支那の方は如何ですか。蚕も終り麦刈りもすんで田植の準備中です。〈略〉今に伊深一面の青田となりませう。兵隊さん支那の子供は戦争の時はどこにかくれていますか。支那の子供は気の毒なことでせう。〈略〉僕は兎を二匹飼ってゐますがだんだん腹が大きくなったやうですから子を産むでせう。生まれたらたくさん飼って兵隊さんのために毛皮を送ります。僕は日本の為に働いて下さる兵隊さんのことを思って一生懸命に勉強します。兵隊さんお体を大切にしてください」。この文章を含め30人の児童の慰問文、及び、教職員一同の兵隊への激励や村の近況報告が収録されていた。

地元に眠る戦争の資料を、失われる前に残そう。昭和54年、『伊深親子文庫』を立ち上げた主婦たちが住民に呼びかけると、前述の文集が提供された。ある伊深出身の兵士が、中国から一時帰省する際に文集を持ち帰ったのだ。兵士はそのあと、再び別の戦地に赴き、帰らぬ人となった。中国に送った文集だけが故郷に残った。主婦たちはその一字一句を3ヶ月がかりで鉄筆でなぞり、文集刊行から40年目に再発行した。「平成」が幕を閉じる2019年、その再発行からさらに40年の時が経つことになる。

4.

祖母が死んだ翌月の2016年12月、東京都江東区にて東京大空襲の体験者に会った。1945年3月10日の空襲当日は、奇しくも彼女の6歳の誕生日だった。長い沈黙を経た1971（昭和46）年、32歳となった彼女は26年前の体験をはじめて綴ることを決心する。その手記は『東京大空襲・戦災誌 第1巻』に「誕生日のその日に」として収録された。高度経済成長によって変貌したまち並みに、彼女は焼け野原の風景を重ね見た。それから間もなく、語ることの困難が再び彼女を襲う。2度目の沈黙がおよそ30年続いたあと、いま、彼女は語り部として言葉を紡ぎ始めている。

東京大空襲・戦災資料センターが保管していた彼女の手書き原稿を45年ぶりに自身に再読してもらいながら、沈黙の意味を探った。空襲後に岐阜県の中津川市に疎開した話。「〈略〉東京で空襲があったことは中津川まで伝わってないので、誰も知らないんです。先生さえも。〈略〉だから『空襲で大変だったでしょ、どうだった』と聞いてくる人もいなかったし、私から言うこともしなかったし、言うこともできなかった。〈略〉小学1年の春から入学した学校では、東京で大きな空襲があったことは私しか知らなかった。それがすごくつらいことでもあったし、救いにもなった」。

話を聞いたあと、記憶を頼りに当時の自宅周辺を地図に描いてもらい、あの夜の自宅からの避難の足取りを一緒に歩いた。「あの日はとてつもなく寒かった。3.11の時も、そんな感じだったのかもしれない…」。当時住んでいた自宅の跡に着く。6歳の誕生日以来、3度目の訪問だった。「家の跡形も何にもなかったんですが、仕事用の1メートル四方くらいの金庫が、半分くらい溶けた状況で残っていました。金庫を開けた途端に中に入っていた紙幣が燃えながら空に舞っていきました。〈略〉火が収まってから中を見たら、銅貨が溶けていろんな形に固まっていて。あぁ、うさぎさんだぁって喜んじゃったんですよ、とっさに」。あの日のあとを追うことで、文字に残らなかった声が再生されていく。

5.

祖父が亡くなった1年後、祖母が亡くなる1ヶ月前の2015年10月、岩手県の大槌町の「城山」にいた。町全体とその先に広がる海が一望できる、地元の人に親しまれている小高い山だ。『復興カメラ』のメンバーに連れて来てもらった。復興カメラとは、大槌町や隣接する釜石市の復興の様子を、住民みずからの目をとおして記録していく試みだ。定点観測にも取り組んでいて、城山からの眺めも定期的に記録されており、その変遷がわかる。震災から7年が経とうとしている。いまも変わり続けている風景があれば、まったく変化していない風景もある。いずれにしても、風景を失うことが、風景の不在を埋めようとするもうひとつの風景を創り出している。

2016年9月、釜石市でこんなことを聞いた。筆者が別の取り組みで、東京の井の頭自然文化園で飼育されていた象の“はな子”の写真を広く募集していた頃だ。「釜石には有名な鉄鋼の会社があるでしょ。昔から鉄が採れた場所だから。あそこの会社の保養施設が、井の頭の近くの三鷹にあったんです。だから、ここら辺の地元の従業員は、まとまった休みがもらえると家族と三鷹に行って、近くの動物園にも行っていたと思います。津波で流された持ち主不明の写真アルバムが、役場に保管されているんです。たぶんその中に、はな子と一緒に撮った記念写真もあるんじゃないかな」。

2017年の夏、釜石市内の写真館を訪ねていた。話を聞いている1時間の間に、店主は3つの仕事をひとつずつ片付けていた。1つ目は遺影。誰かが亡くなったのだろう。2つ目は赤ちゃんの記念写真。2人目なんです。アルバムを受け取りに店の中に入って来た父親が笑った。3つ目は工事現場の写真。できてる？ 作業服を着た人が、現像仕立ての盛り土の記録写真を持ち帰っていった。あの日が訪れるその前も、その後も、ファインダーを覗き続けてきたまちの“写真屋さん”。いま、彼らの眼に映っているのは、どんな人、どんな風景なのか。

記録を残すという営みの記録は、誰が残すのか。現在、釜石を起点として、まちの写真館に焦点を当てた取り組みを準備している。“あの日”のあとを追う試みの、あとを追う。その道のりは、いつしか「記録が生まれる場所」へと遡る経路となっていた。ここに記したのは、「記録が生まれる場所」に向かう途上に見た、いくつかの風景。

これは私に起きたことじゃない、ひとごとなんだわと。
私自身も泣き、食べ物や寝る場所をさがし、
息子を抱きしめて落ちつかせようとしているのに、
心のなかではいつも感じていたんです。
私は観客なんだと。考えていたんじゃありません。

（スベトラーナ・アレクシエービッチ著、松本妙子訳
『チェルノブイリの祈り　未来の物語』岩波現代文庫、2011年）





Photo by Takashi Iwabuchi

屋根裏ハイツ『とおくはちかい』

2017年6月29日 - 7月3日　せんだい演劇工房 10-BOX box-1〈宮城県仙台市〉
2017年7月7日 - 7月9日　ST スポット〈神奈川県横浜市〉
作・演出｜中村大地　出演｜村岡佳奈、牧田夏姫

あー、でもなんか、すごいその場面は覚えてるけどさ、
そのシーンだけ、あとは覚えてないんだよね。
や、そのシーンだけっていうかもっとほんとに場面場面、断片断片、がこう…あって、
つながりが全然ないっていうか、そういう感じなんだよな。

「きく」ときに
わたしたちに起きるふるまい

Aの暮らす「この街」には、どうやら少し前に災害があったらしい。そこにBが訪ねてくる。久しぶりに会ったふたりは、リビングでお茶を飲みながらなんてことのない会話をする。そして10年後、またふたりは同じ部屋で出会う。

この作品は、災害から半年後と10年後という時間を隔てた会話によって、ある出来事に関する「当事者と非当事者の忘れ方とその速度の違い」を描いている。明るさのなかに言い淀みと沈黙があり、ときおり机の上のラジオからは男性の声で『チェルノブイリの祈り―未来の物語』の一節が流れてくる。ただし、ソビエトといった固有名や原発といった言葉は伏せられている。時はただ淡々と流れる。ふたりの話し声は、大きくもなく、小さくもなく、ふつうだ。しかし、舞台上の声をきくには、観客は前に身をかがめて耳をそばだてないといけない。静かな会話に向き合うわたしたちの身体は、いつしかふたりの「違い」をそのふるまいのなかに見ることになる。

屋根裏ハイツ｜
2013年、中村大地（P.61へ）が演出を務める演劇カンパニーとして仙台を拠点に設立。少数のメンバーで話し合い、演劇に対して常に疑いのまなざしを向けながら試行と実験を繰り返し、人が生き抜くために必要な「役立つ演劇」を創出することを目的としている。最終的には家を建てたい。

ラジオ下神白

―あのときあのまちの音楽からいまここへ―

第1集収録日｜2017年2月27日　下神白団地集会所〈福島県いわき市〉
第2集収録日｜2017年2月28日、7月3日　下神白団地各個人宅〈福島県いわき市〉

誰かの思い出の曲が、また誰かの記憶へ

「あのときあのまちの音楽からいまここへ」というフレーズで、ラジオがはじまる。初めて買ったレコードの話にはじまり、地域のテーマパーク『常磐ハワイアンセンター』の思い出に花が咲き、いまの気持ちへ。エピソードと楽曲のあいだには、古いテレビCMが挟まれ、地域でカフェをひらいたマスターへの取材など「お知らせコーナー」もある。

福島県いわき市、下神白団地。この県営の復興公営住宅に暮らす方々をゲストに、個人の大切な記憶を、当時の馴染み深い音楽を通じて語ってもらう。パーソナリティは、文化活動家・アーティストのアサダワタル（P.61）さんだ。ラジオ番組風に編集された音源CDはアサダさんと「ラジオ下神白」をともに運営するメンバーの手によって一戸一戸手渡しで配布されている。

下神白団地では、富岡町、大熊町、浪江町、双葉町から避難してきた約200世帯が、地域ごと、各棟に分かれて「一時的に」暮らしている。被災状況、住まい、賠償の違いなど、さまざまな隔たりを抱えながら日々を送っていたが、2017年に入って帰宅困難地域が一部解除され、もとのまちに戻る人や、別の復興公営住宅に入る人、震災前に住んでいた家のインフラの故障で団地と二拠点生活をする人など状況はより複雑になってきている。

ラジオではリクエストも募集している。あるリクエスト曲が、たまたま別の方にとっても思い出の曲だったことも。いまでは朝晩欠かさずきいてくれているという。思わぬエピソードが零れ落ちる。

一人ひとりの声を通して、同じ土地や違う場所に暮らす人々が出会う。誰かの思い出の曲が、また別の誰かの記憶を運んでくる。

**「誰のせいだ」っていうとその「せいだ」ってことを言うこと自体が、
わたし胸が痛くなるの。だからそうじゃなくて、
もういいとこだけ仕舞い込んで、そして自分でこころを今度
健康にしていかなきゃなんねえなっていうように、
わたし考えるようになったの。**

（第1集『常磐ハワイアンセンターの思い出など』14. 振り返り／〜これからのこと）



主催｜いわき市、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人Wunderground

大風呂敷のこと

中﨑透（美術家）



Photo by
HOKOI Takashi

以前、2011年8月15日に福島市で開催された『フェスティバルFUKUSHIMA!』を機に始まった『福島大風呂敷』についての経緯をブログに書いていた。2011年の夏くらいまでのことだったので、今回はそれからのことを、とは言っても6年以上経っているので概略的になってしまうかもしれないが、最近まで起きていることを書いていきたい。

個人的なことでいくと、2011年は水戸、福島、仙台、東京あたりを行ったり来たりな生活、制作が続いていた。そのなかでフェスティバルが終わり、秋が深まる頃、急速に日常が戻る感覚が各地であった。もちろん被害の大きかった沿岸部や原発由来も含め避難生活が続く被災者の方々や地域や職種によって日常とはほど遠い状況であったがその一方で、あくまで僕自身の肌感覚ではあるが、夏くらいまで続いた非常事態な空気感がサーっと普段に戻っていく感じがした。ある種、我に返るというか。とにかくやろう、から各地のそれぞれの問題に冷静に向き合ってそれぞれ丁寧にやっていこう、みたいな静かな変化。勢いで一緒にやれていたことが、それぞれの地域や状況にちゃんと向き合っていくとやるべきこともバラバラでそんなに一緒にやれなかったり、目指したい場所は近いはずなのに真逆のアプローチをすることもあったり、「分断」という言葉をよく耳にするようになったのもその頃だった気がする。

フェスティバル以後もプロジェクトFUKUSHIMA!のメンバーのなかでも議論は続いた。震災直後の1週間、1カ月ごとのジェットコースターのように状況が変化した状況とも違う、じわじわとした捻れるような変化、そんななかでのやりとりは濃密で活発であった。

2年目のフェスティバルを考えるときに出てきた結論としては、大きな中心的なフェスではなく、12日間というコア期間を設けて、世界中で賛同する大小さまざまなフェス、イベントが100以上開催される、という形態だった。『Flags Across Borders』と題し、大風呂敷を解体し、1000枚を超える色も大きさもバラバラな旗につくり直して、各地に送る。バラバラなままバラバラに旗を掲げての

フェス、考え方や立場、状況も違うままにお互いを尊重してともにいられる社会、そんなイメージを出発点としていた。

少し戻るかもしれないが、フェスの前後のプロジェクトFUKUSHIMA!における大風呂敷の立ち位置みたいなものに、ちょっと変化があったかもしれない。もともと関わる人たちが音楽の分野が多かったり、大風呂敷の企画自体のスタートも遅かったこともあり、最初はプロジェクト全体からすると僕自身もオマケくらいの位置と認識して進めていた。

余談かもしれないが、震災の直後、たくさんの音楽家が身体ひとつ、楽器ひとつで何かしらのアクションを起こすなか、美術の分野の持つスピードの遅さみたいなものにヤキモキした気持ちを多くの美術家が抱いたんじゃないだろうか。僕もその一人だったわけだが、大風呂敷の広がる光景を見たとき、もしくはさらに時間が経ち会場の写真をいろんな機会に目にするたびに、遅いメディアだからこその残り方や必要性みたいなことにあらためて気づき、役割分担というか、まあまあ、焦らずじっくりやっていこうかみたいな気分になった。

そうそう、オマケ気分がフェスが終わってみたらプロジェクトを象徴する重要なピースのひとつになっていたなと思い返しながら、一緒に大風呂敷を担当していたアサノコウタくんの携わる、建築という分野も一般的には美術よりさらに一回りスピードの遅いメディアだなあと思ったりしつつ、あらためて多くの分野が混ぜこぜになってできあがったプロジェクトなんだと再認識した。

2013年はミュージシャンの遠藤ミチロウさんが盆踊りはどうだろうかと発案したところから急速に進展して、複数の櫓（やぐら）を囲んだ生演奏によるオリジナル楽曲を中心とした盆踊りフェスティバルになる。それまで変化する状況で試行錯誤が続いたが本番の終わったあと、「うん、これで行こう」というちょっとした確信めいたことをたぶんそれぞれに感じたのだろう。それ以降いまのところ2017年までの夏のフェスティバルは、福島駅から徒歩圏内の「街なか広場」を会場に盆踊りを開催している。

当初から、参加者が当事者になるというのは目指すべきひとつのテーマだったように思っていて、特に2012年はそのための工夫をいろいろ試みていたものの、なかなかしっくりきていなかった。音楽に例えるとステージがあってミュージシャンがいると観客はどうしても受け手になってしまう。「盆踊りの場合、演奏していても誰もこっちを見ていなくて楽しそうにみんな踊ってるんだよ」と嬉しそうに話す大友さんの言葉が印象に残っているが、古典的でありながら文字通り観客が主役になってしまう形式であった。

この年からプロジェクトFUKUSHIMA!は『あいちトリエンナーレ』をきっかけに県外の各所に呼ばれる機会が増える。森美術館での展覧会への参加、2014年は札幌、多治見、東京でフェスティバルが開催され、フジロックにも参加した。

福島県内での新聞では各地の放射線量を始め日々細かな情報が更新されていた。一方で全国紙になるとショッキングなニュースが稀に取り上げられるくらいで、福島の内と外ではだいぶ現実とイメージのズレが大きくなっている状況があり、県外への企画の参加はそういった状況への応答としても機能するかもしれないと積極的に動いていった。

2012年から2013年の時期、大風呂敷の県外での使用や展示に関して何度か、放射能を持ち込むな、といった声を耳にした。もちろんそういう声があるのも当然で、事前に専門家による大風呂敷の線量の測定も行なっていた。ちなみに2011年の会場の線量はおよそ東京の4、5倍くらいで、1日野外に敷いていたので東京の野外に1週間程度置いてあったもの、と想像してもらうといいかもしれない。さらにそれを洗浄したものなので、数字はびっくりするくらいでなかった。ここで問題なのは、数字とか科学のことではなく、一度怖いと思ったことは「怖い」という人間の感情の問題であって、知識や科学のことと感情との折り合わなさというか、噛み合わなさというか、そういった難しさを実感した。

直接口に出されなくても苦情が出る可能性に配慮する企画者の気持ち

もとてもよくわかる。そのような流れのなかで福島から大風呂敷を持っていくのではなく、現地で布を集めその土地独自の大風呂敷を制作するという選択が自然となされた。モノ自体ではなく、そのプロセスを持ち込んだことは正解だったのかもしれない。各地域での大風呂敷の制作は2011年の福島のような交流や多くの人の関わりしろを生み、2017年までに名古屋、猪苗代、札幌、多治見、東京、豊田などでも制作された。「大風呂敷サミット」と題した全国から大風呂敷制作に関わった人たちが集まるイベントも開催され、不思議なネットワークが形成されている。

もう一点、2013年の森美術館での展覧会『六本木クロッシング』では、その年の愛知で制作された大風呂敷を展示に使用した。2011年、福島で会場の養生のために制作されたオリジナルの大風呂敷ではなく、別な場所で、特に放射線防護とは縁もない装飾のための大風呂敷、ある意味では素人のつくっただけのパッチワークの布でしかないものが美術館に置かれる様子を見て、実際の機能としてではなく、仕組みの持つ概念や象徴性を担保として、大風呂敷が芸術作品としても成立しているのかもしれないなと考えたりした。

東京での国際演劇祭『フェスティバル トーキョー（F/T）』では2014年から3年続けて池袋西口公園で盆踊りを開催し、札幌でも『札幌国際芸術祭（SIAF）2014』をきっかけに『さっぽろ八月祭』という名前で毎年継続されることになった。2017年のSIAFでは大友さんがゲストディレクターになったこともあり主要プロジェクトのひとつとして大風呂敷が取り上げられ、クロージングイベントとなったモエレ沼公園での2011年の福島を大きく上回る1万平方メートルに及ぶ大風呂敷は圧巻であった。そして、そのほとんどの制作過程の運営を2014年以降に関わった札幌のメンバーを中心に進められたということの意義は大きい。

今回のようにあらためて震災について書いたり話したりする機会が最近増えていて、5年10年とかの節目ではないのになぜだろうと考えたりする。

一昨年くらいだろうか、「この先も大風呂敷がいろんな場所で続いていって、何でこんなパッチワークの布を敷いているのか誰も知らなくて、よくよく調べてみたら福島由来だった、なんてことが将来あったらおもしろいね」なんて話していた。肯定的な意味で大風呂敷が自分たちの手から離れていくのを感じていたからかもしれないし、そもそも大風呂敷とは、と経緯から毎回話すのにはお互い少し手間に感じるほどの時間が経ったというのもあったかもしれない。

と思っていたところ、この2年くらいまた世間的に急速に2011年の震災が忘却というか遠くに感じることが増えてきて、意図的に経緯から話す機会を設けるようにしている。

駆け足で最近までの大風呂敷の展開について書いてきたが、僕自身の関わりのことを少し。

各地で現地制作やコーディネートなどで足を運ぶ機会は多い。その都度、福島について尋ねられるわけだが茨城の水戸を拠点にする僕がそのことについて話すことはいまでも戸惑うことは多い。そんなとき福島の当事者ではないが、あくまでプロジェクトFUKUSHIMA!の一参加メンバーとして、大風呂敷のプロジェクトを進めてきた当事者としてというのを前提に話すようにしている。プロジェクトを通して出会った福島に住む友人たちから見聞きした状況として話したりすることもあるが、案外水戸に住む人としての自分の震災後の話になることもある。

最初の2回のフェスの時はそれぞれ1カ月くらい福島市に滞在して準備をしたりしていたが、盆踊りになってからはほかの仕事もあり、数日から1週間弱の滞在になっている。

と言いつつ、お盆の8月15日に地元を不在にする夏がもう7回を過ぎた。毎年、夏になると足を運び、顔が見える人たちと祭りの準備をして、踊って、ビールを飲む。いろいろあったりするけど「元気にしてた？ 今年も会えたね」なんて何でもない話とバカ話がほとんどで、いまでもそんな感じで福島の夏を送っていたりする。

福島大風呂敷、制作日記２０１１

中﨑透

どうやって、大風呂敷ははじまったのだろうか？　震災直後にはじまったこのプロジェクトについて、２０１１年９月28日から２０１２年３月24日のあいだにＡＳＴＴのサイト*で書かれていたレポートを再録します。

書きそびれていた本番当日の記事は、今回書き下ろしです。

＊　初出は国立国会図書館インターネット収集保存事業(WARP) 内の旧ASTTウェブサイトで閲覧可。
http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10205361/asttr.jp

プロローグ

3月11日の地震があったとき、僕はたまたま水戸芸術館（以下、水戸芸）にいた。不安ながらも、見知った顔がちらほらあったのがありがたかった。何の話だっけ、そうそう、『福島大風呂敷』についていくつかに分けて書いていこうと思う。そもそも福島大風呂敷の母体である『プロジェクトFUKUSHIMA!』を手伝うことになったのは、主催者の一人、音楽家の大友良英さんとの縁であり、水戸芸で1月まで開催されていた展覧会『大友良英／アンサンブルズ２０１０―共振―』にどっぷり関わったことによるところが大きい。

3月26日だったかな、震災により中止となった水戸芸での展覧会『クワイエット・アテンションズ』の出品作家であるＳａｃｈｉｋｏ Ｍさんの作品撤収に合わせて、大友さんも一緒に水戸にやって来た。この時期、客人なんてのはなかなかいなかったこともあり、キワマリ荘で鍋をすることにした。ふたりにとっても久しぶりに訪れる水戸はよい機会であったようだが、水戸の辺りでは電車も動いてないし、ガソリンも手に入らない、場所によってはようやくライフラインが復旧してきたといったタイミングで、こんなにまともに集まって、普通に酒を呑む機会はたぶんそれぞれ久しぶりで、ネット上では無事を確認しつつもやっと顔が見れた、なんてことが多々ある場となった。普通にこうやって集まって、鍋をつついてビール片手にくだらない話をする。そんな日常が、こんなにありがたいってことをあらためて思い知った。

4月4日、吉祥寺の喫茶店で大友さんとのんびり話す。常磐線も動くようになり、震災以降初めて水戸を離れた。確かその直前に大友さんがミュージシャンの遠藤ミチロウさんと会って、「福島でフェスをやらないか」という誘いを受けたことや、大友さんが両親の住む福島市に近いうちに行こうと思ってるなんて話を聞いたりした。地震のこと、原発のこと、デモのこと、メディアのこと、などなど。それぞれのことは白黒が簡単につくようなことではなく、むしろ強引に白黒つけることによって多くのことに対して思考停止になることって結構あるなあ、なんて話をしていたように思う。その足で3週間ほど関西から九州にかけて会いたい人を尋ねてまわり、ゴールデンウィークになる頃に仙台や石巻などの東北の地を訪れた。その辺りでは、あまりうまくは言えないけれど、いかに互いの状況がわかりあえないもんかということがわかったというか、そんななかでわからないままのことを余白としてどう受け入れながら互いに向き合うか、そんな感じのことを考えていた。

プロジェクトFUKUSHIMA!の最初の記者発表があったのは、ゴールデンウィークの終わり頃。5月中旬に東京で自分の展覧会があって、そこに大友さんをゲストに招いてトークイベントをした。福島のこと、プロジェクトFUKUSHIMA!のこと、すでにネット上で大友さんの話していることを目にする、耳にする機会はあったけど、あらためて聞いてみたかったし、いろんな場所で何度話してもいい話だと思っていた。その日の打ち上げのときに、「2、3週間くらい福島にプロジェクトの手伝いに行きますよ」という話をしたと思う。なんとなくイメージしていたこととしては、音楽の分野のメンバーに多そうだったので、美術の分野の人もいると幅が広がるかな、とか。作品を制作して展示する、というよりは福島に暮らし制作する人の何らかのサポートをするようなことができるかな、とか。外から来た人が一方的に何かをするというより、中の人と外の人が合わさって、内なる声が湧き上がってくるような、そんな様子をぼんやりと想像した。





芝生に布を敷く、から大風呂敷へ

7月初旬に福島市内へのリサーチに同行する。その数日前に電話があった。「放射線を防ぐこともあって芝生に布を敷くというアイディアが放射線衛生学の専門家・木村真三先生から出てきていて、当日観客に風呂敷などの布を持ち寄ってもらい、2時間くらいでそれらを設置して、しかもそれらを何らかのアート作品にできないか？」という話だった気がする。とんちみたいな話だ。1万人が持ち寄った布をたった2時間で設置すること自体がまず無理だし、そんな安直に作品になるくらいなら美術家は苦労しない。なんてことを思いながら、なんなく聞き流すことにする。

東京駅で集まって、大友さん、マネージメントの野田茂則さん、プロジェクトスタッフでもあるＮＨＫのディレクターの山岸清之進さんの4人で、新幹線で福島市へ向かう。車内で大友さんと話し合う。ものの5分くらいで、つい思いついてしまった。

「プロジェクトFUKUSHIMA!って大風呂敷広げちゃったようなもんですよね。実際に大風呂敷を広げちゃうってどうですか？」

プロジェクトそのものを大風呂敷になぞらえて、多くの布を集めて縫い合わせ、会場で巨大な布を、現実の大風呂敷として多くの人の手で広げる。そんなイメージが浮かんだ。演者と観客という関係だけでなく、もう少し違った関わりしろを持つ何かができるといいなとも思っていたので、なんだかストンと落ちたような気がした。反面、口が滑った気もした。しまったなあ。トントン拍子で話が転がる。会場の芝生がどんな広さかもわからないまま、不安と期待が一気に増した状態で福島に辿り着く。

その日の夜は、福島事務局メンバーとの打ち合わせが深夜まで続く。隙間で話す些細な世間話のなかに、うまく言えないのだけど、水戸や仙台、東京ともまったく違う震災後の空気みたいなものを感じる。実際はわからないけど、印象として、無知で留まっている人はほとんどいない。みんなビックリするくらい多くのことを知っている。その上で現実と向き合い、それぞれが考え続けながら、ぎりぎりの判断をし続けている。そんなことを思った。

市内に住む若い建築家のアサノコウタに初めて会ったのもこの日の深夜。

「君も一緒に大風呂敷を広げないか？」。深夜のテンションで無茶ぶりをして誘

う。結構じっくり話す。建築畑の人とは一緒に仕事していて、アプローチ方法は違うけれど、考えていることの相性がいいことが多くて、彼にもやはりそんな印象を受けた。

数年前から地元福島に拠点を移して活動しているアサノくん、割と毎回大きいことを最初に口に出してしまうらしく、僕らが大風呂敷の話を切り出す前に「よく大風呂敷を広げちゃうんですよ〜」と、自己紹介。ある意味、運命的な出会いだったのかもしれない。

翌日は会場となる四季の里をリサーチに行く。歩幅で大まかな測量をして、大まかな計算から1300㎡くらいの布の量を目標にしていけばそれなりになるんじゃないかと数字を弾き出す。それが大きな間違いであったことに気づくのは、まだまだ先の話である。

福島へ

水戸に戻ってからは、『福島大風呂敷』と題した呼びかけのテキストを仕上げ、大友さんや野田さんと揉みながら詰める。イメージドローイングも制作して、WEBでも告知を開始する。Twitterでの大友さんの告知もあり、多くの反響が返ってくる。はじめは、とりあえず布を送ってもらって福島で縫い合わせるということだけを考えていたのだけど、各地で布を集めて縫い合わせてくれるという声がぽつぽつと挙ってきて、そういった動きをどんどん各地で進めてもらうことにする。先が見えない動き出しだっただけに、心強く、本当にありがたかった。それと、「大風呂敷を広げる」というシンプルな言葉の的を得た感じと強さをあらためて感じる。

7月22日、福島に向かう。途中の数日は仕事で中抜けしたけど、基本的にそれから撤収の終わる8月17日までずっと滞在することになった。現地で足がなかったこともあり、水戸から50ccの原付を走らせた。みんな手弁当なだけにお金もないのだ。滞在先は大友さんの実家。食事もしばしば大友さんのご両親のつくるおいしいご飯をいただきながらの日々となった。そういった持ち出しというか、手づくり具合がおもしろかったりもした。





福島へののんびりとした道中はよい機会となった。小さい頃から福島には何かにつけてよく訪れていて、その道のりは10数年ぶりではあるけど、通い慣れた道だった。ふとした瞬間に身体が裏道を憶えていたり、ところどころの風景が記憶と重なったりしながら楽しむ。その記憶の場所は、以前クリストが壮大なアンブレラプロジェクトを行ったエリアともわりと近くて、いわゆる素敵な日本の里山風景が広がっているのだけど、河原でごろごろしたり、川で遊んだりするのを想像すると、一瞬躊躇する現状に複雑な気分になる。放射線衛生学者の木村さんに初めてお会いしたのも、福島市に着いた夜だったと思う。この人のお陰で大風呂敷という大変なことに巻き込まれてしまったわけだけど、なんだか気さくな方で、構えずに、すっと言葉が身体に入ってくるというか、覚悟ある気持ちよい姿勢の人だった。

木村さんとの対話のなかで、なんだか少し肩の力が抜けるのを感じた。それは別に何かに安心したわけでも、大丈夫ですよと言われたわけでもなく、無知が故にすべてに対して警戒し緊張していたことを、特に警戒すべきところやその有効な方法、逆にそこまで過剰に意識しなくてもよいポイントを専門家からきくことで、意識のメリハリというか、力の抜きどころのようなものをイメージできたからなのかなと思った。

とりあえずは作業場を整えるところから始める。大友さんの実家はもともと工場だった物件で、しばらく使っていなかった部屋がそのままに大風呂敷工場に生まれ変わることとなる。

手始めに自分の母親が溜め込んでいた布を縫い始める。大友さんのお母さんの使い込んだミシンを使わせてもらって、調子が悪いとお父さんがメンテナンスしてくれたりして、どこまでもアットホームだ。本番まで既に3週間を切ったその頃に、ようやく僕らはミシンの使い方を教えてもらうことから始めることになる。大風呂敷を広げるまでの道のりは遥か遠い。

少しずつ集まってくる

7月は、もろもろの下地づくりをした。僕らがミシンすらろくに扱ったことがないこともそうだが、大風呂敷なんて誰もつくったことがないわけで、どのように進めていくか試行錯誤して、作戦を練り続けていた。そんななか、募集していた縫子ボランティアに応募してくれる方が少しずつ増えてきたり、日に日に全国のあちこちから布が届くようになってきた。既に縫い合わされた大きな1枚布が届いたのには、おおいに喜んだ。福島駅の近くでオーダーメイドのドレスをつくっている方の工房に、応募フォームを頼りに突然訪ねたりもした。縫子に申し込んでくれた福島に住む手芸の達人たち（?）は、それぞれにいろんな経験を持っているだけにみんなああだこうだ言いながら、巨大な風呂敷の広げ方について一緒に考えてくれた。少しずつ輪郭のようなものができていった。





7月末から数日福島を離れる。水戸芸での展覧会のオープニング、東京でのレクチャー、せんだいメディアテークでのワークショップなど。震災のときは水戸芸にいた。美術館が再開するのに4カ月半かかった。あのとき不安な表情をして多くの人が水戸芸の広場に集まっていた。オープニングで現代美術家の大巻伸嗣さんの大量のシャボン玉を広場にあげるパフォーマンスがあったんだけど、同じ広場にたくさんの人が集まっていて、それぞれの楽しそうな表情が妙に時間の流れを感じさせた。適切な言葉がうまく思い浮かばないのだけど、福島、水戸、仙台、東京と行ったり来たりしていて、震災以降の時間を経ての状況の変化というか、違いやズレのようなものが立体的に身体に入ってきてる感覚がある。具体的にこう、という感じではないんだけど、確かにある違和感のようなもの、考えて動くための大切なとっかかり。

8月4日、福島に戻る。大風呂敷スタジオはにわかに活気づいてきている。僕が不在の間は、アサノくんが現場を回してくれていた。入れ違いで彼は仕事のために新潟へ向かった。そうなのだ、なんだかんだでふたりとも揃って大風呂敷の作業に本格突入したのは本番1週間くらい前だったりした。内緒である。

あと1週間になってきた

本番の1週間くらい前に作成したチラシに寄稿したテキストを載せておく。この文章は、基本的にしばし時間が経ってからのふりかえりで書いているのだけど、当時のその渦中でのテキストは少しだけ空気感が違っていたりもする。たぶん8月9日くらいに執筆。8月15日の告知のためのチラシなのに、なんでそんな時期に原稿書いているんだという疑問はつきないが、考えるな。

＊＊＊

「真夏の福島に大風呂敷は広がるのか?」

当日がやってくるまで一体どうなるかなんてなかなかわからないのはいつものことなんですが、いまのところ毎日毎日ミシンの前でたくさんの人と布を縫っています。毎日毎日、冗談みたいに北は北海道、南は沖縄まで全国津々浦々から布が送られてきます。布の詰まった荷を開封すると、メッセージや思い思いの縫い合わせが目に飛び込み、我らが大風呂敷スタジオ一同で一喜一憂しています。スタジオの方もおかしなことになっていて、地元福島の主婦から、帰省中の学生さん、東京、仙台はじめ各地からやってくる人、さまざまな場所、世代がゆるやかに集まり、ちょっとした茶のみ話のはずなのに、震災や原発のことだったり、それぞれの状況や考えに互いに耳を傾け合うなんだかとてもよい機会になっています。

フクシマから、向き合い、考え、話し、動き始める、そういう意味では、少しずつだけどここではすでに大風呂敷が広がり始めています。
8月15日の午前9時から、四季の里にて福島大風呂敷を広げます。足を運んでみませんか？ 手を動かしてみませんか？ 目撃してみませんか？ 隣の人と話してみませんか？ くだらないダジャレのような話だけど、そこからホントに広がってしまう大風呂敷があってもいいなと思っています。

福島大風呂敷ディレクター　中﨑透（美術家）

＊＊＊

このあたりの数日は、なんだかとてもおもしろい時間だった。本番の2、3日前は、それはそれでおもしろかったんだけど、ワークショップに参加する人や、フェスの観覧のために前日入りした人まで、あちこちから大勢の人が手伝いに来てくれていて、直前のばたばた感も混じり合って、お互いの顔や名前を把握できないままに突っ走っていくような状況だった。なので、そのちょっと前のこの時期は、休憩時間にのんびり自己紹介したり、わりとお互いが何者なのかを認識できたり、作業よりもちょっとしたことで話し込んでしまったり、そういう時間を内包している時間がとても贅沢だった。しかも地元の人と外からやって来た人の割合や、年齢層の散らばり具合が妙にいい感じで、その都度全然違うそれぞれの背景みたいなものを互いに注意深く聞き合うような場が自然とできていたように思う。

ちょうどその時期、本番1週間前にしてようやくというか、やっとというか、僕とアサノくんがふたり揃って、現場に張り付きで大風呂敷スタジオが稼働し始める。だいたい定まってきた作業工程としては、まず最小単位として、2.5m×2.5mの布を大量生産して、順々につなぎ合わせて、5m×5mにする。そこから10m×10mをつくっていく。実際のところ、畳んだり保管したりすることを考えると、この屋内のスタジオで無理なく（結構無理している）制作できる最大サイズが10m×10mくらいだろうと落ち着いた。それを当日現地で鉄製の杭を打ち込んでつなぎ合わせていく計画だ。





毎日10〜20人くらいが入れ替わり立ち代わりで作業が進む。直前の2、3日はたぶん40〜50人くらいは出入りしていたと思う。届いた布を、送り主のラベルを記録しつつ、サイズに応じて仕分けする人、バラバラのサイズの布を2.5m×2.5mに組み合わせて仮止めする人、それを縫う人、さらに5m×5mにつぎ合わせて縫う人、畳む人、量を確認しながらでき上がった布を仕分けする人、ちょっといびつな工場の流れ作業みたいな状態になっていた。

送られて来た布、縫い合わされた中風呂敷が届くなか、添えられた手紙や、布に書き込まれたメッセージにスタッフ一同で一喜一憂しながら作業が進む。

8月に入ると日に日に送られてくる布の量も増えてきて、毎日10箱を越える段ボールがスタジオに届き、縫っても縫っても増えていく無限地獄のような錯覚にしばしば陥ったりしたのも正直なところ。全国からの送り主のラベルは保管していたけれど、それぞれの場所に布を持ち寄ってくれた人、一緒に縫い合わせてくれた人たちなど、いつしかどれだけの人がそこに関わってくれたのかはまったく把握できなくなる。文字通り、北は北海道から、南は沖縄まで、全国津々浦々から集まってきた。

実質のスタッフが僕とアサノくんしかいなかったので、人の受け入れから、チラシのデザインから、何から何まで。後半はコーディネーターの坂口千秋さんが加わってくれて本当にありがたかった。8月10日くらいから猛烈にペースが上がる。

サイズのこと、コンセプトのこととか

7月に会場を下見に行ったとき、漠然とだけど歩幅で測ったりとしながら1300㎡くらいをイメージするところから始めた。会場の芝生全面というよりは、とりあえずメインステージの客席エリアが一面の芝生になっていたので、あくまでそのエリアの大部分が覆えればなんとかなるだろう、といった計画であった。

しかし、7月も終わろうとしている頃の深夜にミシン作業をしてると、大友さんが突然ビックリするようなことを言い出した。

「音楽解放区というたくさんの人たちが会場の至る所、思い思いの場所で演奏する時間帯があるのだから、やっぱり公園の芝生の全部を覆わないといけないんじゃないのか。」

「ええーーーー。。。」

思いついてしまった大友さんが厄介なのはなんだか知っている。試しに図面に当てはめて見てみると、どうやら3000〜4000㎡は必要そうである。ただでさえ大風呂敷だったのが、本番2週間前にさらに3倍ほどに広がったわけで、この日のことは「7月の悪夢」と呼ばれている。





最初に公園管理事務所みたいなところで渡された図面があって、僕らはとりあえずそれを基にぼんやりとサイズ感をイメージしていた。ちゃんとした図面というよりは、便宜上の施設配置図といったようなもので面積とかはそこまで精密じゃないんだろうなあ、と薄々気づいていた。なので、8月に入ってからはアサノくんが住宅地図をベースに図面を起こす作業を進めた。もろもろ作業が建て込んでいて後手に回ってはいたんだけど、ある日、といっても8月10日は過ぎていて、残り3、4日くらいのタイミングだったと思うんだけど、くそ暑い日の昼下がりにアサノくんが僕に耳打ちした。

「大変なことになりました。さらに倍は必要そうです」

「えええーーーー。。。。」

このまま順調にいけば4000㎡の大台に届くかもしれない、そんな希望が見え始めた矢先のことだった。最初の図面が全然面積が参考にならなかったってことと、素人が歩幅で測っても火傷するだけだぜってふたつのことを学習した。大収穫だ。正確な数字は出てないけど8000㎡あってもどうやら足りなそうだなということだったので、全部覆う、というよりはやれるとこまでやってみる、という路線でいってみることにする。ちなみにその後、この日のことは「8月の白昼夢」と呼ばれている。

福島大風呂敷のコンセプト経緯について少し触れておく。

そもそも、会場の芝生をシートのようなもの覆ったらどうか、といった提案をしたのは放射線衛生学者の木村さんである。少し聞きかじりもあるので厳密ではないが、僕の捉えている内容として書いておくと、大風呂敷で放射能を防ぐ、といった言い方をされていることも多いが、実際ちょっと大文字すぎるなあと思っている。会場の線量を測定した結果、1日だけであれば特に気にするような影響はないだろうといった見解を木村さんはしていた。大風呂敷のない状態での話である。芝生の上に敷かれた1枚の布は外部被曝の線量を下げるのには特に効果はない。その上で、シートや布で芝生を覆う提案は、表面被曝と、衣服や靴の裏に付着した放射性物質の拡散を防ぐことを目的としていた。そこには主催者側からの観客に向けた念入りな配慮といった側面も大きかったと思う。

その辺りで僕も加わり、その時点では、「シートで覆う」が「布や風呂敷を当日の観客に持ってきてもらって覆う」となっていて、大友さんと話すなかで、プロ

ジェクトFUKUSHIMA!の掲げた提案って、大風呂敷を広げちゃったようなもんだねっていう話から、それになぞらえて実際に大風呂敷を広げたらどうだろう、とダジャレのような意味性がくっついて実行に移すことになった。そして制作の過程で話し合うなかで、「拡散を防ぐ意志」という言葉が大友さんから出てきた。

それはこのプロジェクト内の話だけではなく、流通網の発達した現代の日本において今後福島のふるまいとして、測定する、嘘をつかない、公開する、そういったことを徹底することでしかいろんなことが始まらないんじゃないか、というような意味合いでのことだった。自分たちで過剰に見えるくらいに拡散を防ぐ態度や意志を示すことの意義が段々に大きくなっていった。当日フェスティバルに来た観客に向けてというだけでなく、もっと象徴的な意味としての、拡散防止の意志を示す表現としての大風呂敷へと展開していったように思う。そういった経緯から僕個人としては、福島大風呂敷を、放射能を防ぐ実効性よりも、コンセプチャルなアクションとして捉えている部分が大きいかもしれない。ただ、頭でっかちなコンセプト云々とは別な部分で、びっくりするくらい地味な手間のかかる作業の積み重ねで、ものすごく身体的で、それでいて多くの人が主体的に関わるプロセスが自然発生していたことは重要だ。それと、大風呂敷に限らず、このフェスティバル全体のことでもあるけれど、この時期に福島に足を運ぶ、という行為自体が既にひとつのアクションであったと思うし、あの会場で大風呂敷を踏みしめた多くの人は、すでにただの観客ではなくなってしまっていたように感じた。





前夜

本番直前の数日は、毎日50人くらいが入れ替わりで作業していた。玄関先が布調整スペース、工場部分がメインのミシン縫いスペース、外の駐車場は鳩目の金具を打つ場所になり、近所の病院の駐車場に10m×10mの風呂敷を畳むために夜な夜な通い詰め、ついには3階の生活場所も第2工場と名づけられミシンが5台ほど持ち込まれた。正確な目標サイズがわかってから、死に物狂いでやった。最終的には6000㎡を越えるところまでいった。進行状況を逐一見ていて、現場の渦中にいた身からすると、ホントに奇跡のような話だった。少し脇道に逸れるけど、今回は僕も含めみんなボランティアであった。義務ではないし、すべてが埋まらなくても誰が怒るわけでもない、集まれるだけ集まって、縫えるだけ縫って、広げられるだけ広げる。それ以上でも以下でもないが、実際のところはものすごくたくさんの意志や行動の集積でできていて、それを紡いで定着させるというのは実は責任重大で、読み切れない不則の状態をコントロールしながら数値を出していく作業を僕らは延々としていた。前日にアサノくんがようやく仕上げた最終的な風呂敷の配列図は、いろんなものが組み込まれていて、なんだか美しかった。

最終日は普段の大風呂敷メンバーに加えて、大友さんのオーケストラの参加メンバーや詩人の和合亮一さんのワークショップ参加メンバー、フェスティバルのために前日入りした人たちや事務局メンバーなど、たくさんの人が駆けつけてなんだかお祭りみたいだった。夕方、当日設営のためのミーティングをしたら、50人近くが集まった。6チームに分かれ、それぞれの段取りを共有していく。当日参加する人たちは、このメンバーの指示のもと大風呂敷を広げていく。この時点で、最低限当日の朝にこの人数の人がいてくれるんだということが判明して、少しだけ不安がとれる。

その夜、全然終わらなそうなのに、翌日の団結を深める意味も込めつつ、思い立って30人くらいで温泉に行ってみることにした。バラバラに寄せ集められてやって来ているだけあって、ひどすぎるチームワークの珍道中で、本番が思いやられる。いや、ホントにひどかった。車数台で出かけて、地元じゃないだけに道を間違えたり、互いにケータイも知らないからうまく連絡とれないし、むしろ誰がどの車に乗っているのかも誰も把握していないから、ありとあらゆることが空回りで可笑しかった。うん、ホントに可笑しかった。

それから夜が明けそうなくらいまで20人近くが作業をして、6、7人の戦士がほぼ徹夜で最後の風呂敷まで畳み終える。本番を迎えず、朝方に東京や茨城での仕事のために帰って行く人もいた。なんだったんだろうなあ。なんだか不思議な時間だった。

大友さんはスイカが好きだ。その話は結構知られているようで、布と一緒にスイカが次々と送られてきた。こんなにスイカを食べた夏はなかったから、たぶんスイカを食べるとこの夏を思い出したりするんだろう。1日に2回くらいの恒例のスイカタイム。たまに大友さんがギターを弾き出したりする。そして、くだらない話をして、またミシンに向かう。なんだか贅沢な時間だった。

プロジェクトFUKUSHIMA!が、多くの人がいまの現実と向き合って、考えて、話して、行動するためのちょっとしたテーブルのようなものを目指しているのだとしたら、そこにはささやかながらにそれが実現するよう場ができつつあるのかもなあと思った。

8月15日　大風呂敷を広げると

朝、30分ほどの仮眠というか休憩を挟んでトラックに大風呂敷の積み込みが始まる。確かトラックには大学生とドキュメント撮影に入っていた藤井光さんと僕との3人で乗っていて、突然、当日の朝に会場に向かう場面で使いたいからちょっと歌ってくれないかと藤井くんが振ってきたので、徹夜明けのテンションで大声で歌いながらトラックを運転する。もちろんそんなシーンは映画には1秒も出てこなかった。

会場には、前日のミーティングに参加した人たちも含めると200人近い人たちが大風呂敷を広げるために集まってくれていた。ホッとした、ああ、なんとか広げ切ることができる、と心底ホッとした。プロジェクトFUSUSHIMA!のことや大風呂敷をつくることになった経緯を少し話した後、青空の下で大風呂敷を広げた。あっという間に広がり、芝生一面の会場が冗談みたいな風景に変わった。





くたっと座り込んで、そのあとの記憶がボヤッとしている。広げたみんなで興奮して話していたのを覚えている。布を送ってくれた人が、自分の送った布を見つけるところに居合わせてニヤニヤした。広げるという行為だけじゃなくて、ここまで来てこの大風呂敷の上を歩く、という行為自体が思ってた以上に能動的なアクションになってることに驚いた。

途中でゲリラ豪雨が来た。雷に混じってエンケンさんの叫び声のような歌が響き渡っていた。夕方、ステージでのライブをごろんと横になって半分寝落ちしながら聞いていた。濡れた大風呂敷をどうやって撤収するんだろうかとぼんやり心配しながら身体が全然動かなかった。撤収は結局翌日になった。翌日も会場に来てくれるという手がたくさん挙がったからだ。気持ち良い天気で、みるみるうちに乾いて、これまたあっという間にもとの芝生の風景に戻っていった。

この8月15日のことは、映画になったり、本になったり、テレビ番組になったりしていて、あとになってふりかえる機会があったりもするけど、未だに思い返してもどんな日だったのかっていうのがボヤっとしている。僕自身も大風呂敷のプロジェクト以外のことがろくに見えてなかったのと、関わる人が多すぎて顔も見えてない人もたくさんいて、全体像なんて全然掴めていなかった。たぶん全部が見えてる人なんて誰もいなくて、1万人いたら1万通りのあの日があって、大風呂敷の柄や色も大きさもバラバラな布が縫い合わさってかたちづくられた風景は、なんだかそんな様子をうまく表していたなあと思う。



Photo by Wataru Umehara

わたしの東北の風景

いま、東北で何を見ているのか、
今号に参加してくださった方々にまなざしをわけていただきます。
震災後、東北でどんな経験をしましたか？

是恒さくらさん　広島県呉市生まれ、山形県山形市在住

宮城県の牡鹿半島の先端の町「鮎川浜」をはじめて訪れたのは震災から4年後の2015年。それから2年、津波で曲がったガードレールがまだなまなましい。90歳近い鯨の解体士のツトムさん、東京から移住して地元の鹿猟に加わるアキコさん、対岸の霊島・金華山で巫女だった女性。訪れるたび知り合いが増える。現在アトリエにしている山形県上山市の廃校になった小学校の「郷土資料室」には、行く宛てのない郷土資料が山積み。忘れられていく時代の伝え手だ。山形県大石田町の陶芸家、ブルーノ・ピーフルさんの「薪窯」では地場の粘土に新たな生命が吹き込まれていく。それぞれの場所で変わっていくものと変わらないもの、両方あることに豊かさが見える。


鮎川浜〈宮城県石巻市〉


薪窯〈山形県大石田町〉


郷土資料室〈山形県上山市〉

松本篤さん　兵庫県西脇市生まれ、大阪府大阪市在住

あぁ、ここからの眺めだったのか——。黒い波が町を呑み込んでいく。動画投稿サイトで見たことのあった風景のいまが、目の前にあった。岩手県は大槌町に、町中が一望できる地点がある。「城山」と呼ばれる小高い場所である。はじめてそこに登ったのは、震災から4年後の2015年。復興のプロセスを記録する試み『復興カメラ』のメンバーに連れられて行った。県外から訪問者がやってくると、必ずといってよいほどここからの眺めをはじめに見せるらしい。約20ヶ所ある定点観測ポイントのひとつにもなっているようだ。

復興カメラは、あの日を起点に同じ眺めを何度も重ね撮っている。何度も重ね見ている。風景を失うことが、風景を創ることを生んでいる。


城山〈岩手県大槌町〉





中村大地さん　東京都足立区生まれ、宮城県仙台市在住

最近、自宅から歩いて海に行った。新寺通りをずーっと真っ直ぐ進むと、東部道路を通過して海岸公園までたどり着くことができる。2時間くらいの道だった。車だと20分くらいだろうか。震災から6年以上が経ったいま、まちなかで震災を体感するのは難しいけど、一本道を行けば同じ市内の、いまも津波の痕跡が色濃く残る場所にアクセスできる。出来事との距離を考える。

もう一枚は岩手県西和賀村にて、1カ月滞在して演劇の制作合宿をしたときの写真。静かな温泉宿でのゆったりとした、密なやりとりは本当に豊かだった。このときほどではないけれど、仙台の僕の周辺には少し延伸した、考えごとをして人と話をするのにちょうどいい時間が流れている気がする（のんびりのおかげで慌てることも多いけれど）。


蒲生地区の海岸公園近く
〈宮城県仙台市〉


新寺通り交差点
〈宮城県仙台市〉


ライブハウス・鳳鳴館
〈岩手県西和賀村〉

アサダワタルさん　大阪府堺市生まれ、東京都小金井市在住

下神白団地に住まう御年94歳の女性Tさんご自宅。戦前の女学校時代に共に過ごした2人の学友との忘れられない記憶。3人仲良く映ったモノクロの写真。BGMには淡谷のり子の「別れのブルース」や霧島昇「旅の夜風」。訪問するたびに必ず出てくる牛乳プリンと甘酒の組み合わせ。ラジオ下神白のCDを聴いてくれている。最初は「機械がなくて聴けないから」と断られたが、ラジカセごと貸してよかった。いまでは毎日欠かさず。そのなかに別棟に住むKさんの思い出の曲、藤山一郎の「青い山脈」も入っている。それも聴かれてまた別の記憶を思い出される。帰り際にはかならず、キューピー人形に着せられた手編みの衣装を披露。「どれか好きなのもらってかえって。お子さん生まれたのね、おめでとう。遠慮なくさぁさぁ」。お元気で、また行きます。






下神白団地
〈福島県いわき市〉

中﨑透さん　茨城県水戸市生まれ、同市在住

1―今年の夏に石巻での展覧会に参加した。空がよく見える場所だったので、星空をイメージした作品を制作した。震災の日の水戸の夜、停電で灯りのないなか、煙草を吸おうと外に出たらやたらと星がきれいでなんか悔しかった。展覧会場となった電気屋のオーナーのおっちゃんがその日の夜の話をしてくれた。また別の日のことだったか、見上げた空の星がやたらきれいだった話をしていて、空がつながっていることを思い出した。

2―震災前から有志の手により毎年福島市で開催されていた音楽イベント『FOR座REST』。震災を受けて中止を余儀なくされていたが2015年に開催。いろんな人たちのさまざまなことの詰まった2日間だった。

3―数年前から通行できるようになった、いわきより先の常磐自動車道。一部線量が高めの場所があるがたいして影響があるわけではない、と頭で思っていても運転しながらギュウっとした気持ちになる。春先、思いがけず浪江の山火事の時期に通りかかり、テレビやネットで見たニュースと現実が結びつきハッとした。


宮城県石巻市


常磐自動車道
〈福島県浪江町付近〉


FOR座REST
〈福島県福島市〉

嘉原妙〔編集部〕　兵庫県宝塚市生まれ、東京都江東区在住

表紙の是恒さくらさんの作品と出会ったのは、2017年8月のこと。岩手県盛岡市にあるCyg art galleryの「ART BOOK TERMINAL TOHOKU」で展示されていた『ありふれたくじらジャーナル：牡鹿半島〜太地浦』と題された小冊子と刺繍作品だった。かつて捕鯨を通じて交流のあったふたつの土地の人々に、それぞれの土地の鯨の話を訊ね、いまはもう出会うことのない人々の「記憶の風景」が穏やかに編み紡がれていた。刺繍や語りの隙間から、他者の記憶にふれることの尊さと畏れのような手触りを思い出す。

2017年11月、自宅に一時帰宅するたびに、家の中の放射線量を測って書きとめていた、という手書きのメモを目にした。長屋の床の間に展示されていたその「放射線量計測記録」の冒頭には、赤字ではっきりと「事故から6ヵ月」とある。定規で丁寧に引かれた線、茶の間、台所、こたつの中……。祈りの記録のような数値を前に、しばらくその場を離れられなかった。それは、東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故によって生まれた課題を考える場をつくる「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」が、市民芸術祭『ベップ・アート・マンス2017』（大分県別府市）で行った展示でのことだった。このあと京都にも巡回するという。東北の記憶と記録の実践は、静かに熱を帯びながら、各地へと派生していく。

「下町芸術祭は、阪神淡路大震災から20年を迎えた2015年に始動した芸術祭です」。その一文に惹かれて、2017年11月末に兵庫県神戸市長田区を訪れた。事務局を務めるNPO法人DANCE BOXの劇場の出入り口の眺めが忘れられない。上演がない時は、そこに机を広げて事務所スペースができる。劇場の扉はいつも開かれ、スタッフやダンサー、ふらりとまちの人もやってくる。ほとんどのスタッフは、いま、このまちに暮らしているらしい。生活と表現とまちが緩やかにつながり、内と外の境界が曖昧になりながらも異なる者が共に居る風景がそこにはあった。震災関連の催しは、20年を節目に大きく減ったそうだ。下町芸術祭は、「これからこそ自分たちの手で活動を起こそう」という地元住民の声から始まっていた。

参加者一覧

是恒さくら〔アーティスト〕
1986年生まれ。アラスカ州立大学フェアバンクス校で先住民芸術と絵画を学んだ後、2015年に山形県に移住。2017年、東北芸術工科大学大学院地域デザイン研究領域修了。「記憶のなかに留められた思いにかたちをもたらすこと」をテーマに、さまざまな土地を訪れ、丹念に集めた言葉やイメージをもとに制作を続けている。リトルプレス「ありふれたくじら』主宰。さまざまな土地に暮らす人たちに鯨の話を訊ねてまわり、綴った物語に刺繍を添えて、本を編んでいる。

仲田絵美〔写真家〕
1988年茨城県生まれ。2011年 写真ワークショップ 松本美枝子の「キワマリ荘の写真部」を修了したのち、作品の発表をはじめる。第6回 写真「1ーWALL」審査員奨励賞、第7回同展グランプリ受賞。2015年　写真集『よすが』（赤々舎）刊行。現在、茨城県水戸市を拠点に活動している。

鈴木諒一〔写真家〕
1988年 静岡県 静岡市生まれ。2011年多摩美術大学芸術学科卒、2013年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。主な個展は『観光』（EMON PHOTO GALLERY／広尾、2013年）、『リバー・フィールド』（artdish ／神楽坂、2013年）、グループ展は『Guimarães noc noc 2』（ギマランイス／ポルトガル、2012年）がある。2011年、第5回東野芳明記念・芸術学科優秀卒業論文賞、第1回 EMON PORTFOLIO REVIEW グランプリ受賞。現在、東京在住。

松本篤
〔remo〔NPO法人記録と表現とメディアのための組織〕メンバー〕
1981年生まれ。2005年よりAHA！[Archive for Human Activities／人類の営みのためのアーカイブ」を始動。8ミリフィルムやアマチュア写真といった「市井の人びとによる記録」の価値に着目し、アーキビストなしのアーカイブづくりを模索している。近年は、井の頭自然文化園にいた象の〈はな子〉の記録と記憶を集める取り組み「はな子のいる風景」を実施。また、東京大学大学院学際情報学府博士課程に在籍しコミュニティ・アーカイブの研究を行っている。

中村大地〔作家・演出家〕
1991年生まれ。自身が主宰する「屋根裏ハイツ」という劇団で演出を務め、これまで試演会も含めて5つの作品を発表。その演出作品は起承転結のある大きな虚構の物語世界を描くことよりも、舞台上で起こる行為、現象そのものにフォーカスしている。外部劇団での演出経験も多数。東北で一番おもしろい学生演劇を決める「とうほく学生演劇祭」の事務局、ARCT、一般社団法人NOOK所属。

アサダワタル
〔文化活動家／アーティスト〕
1979年生まれ。言葉や音楽を手がかりに、各地で生活コミュニティに根ざした文化実践と執筆を行う。『住み開き』（筑摩書房）、『コミュニティ難民のススメ』（木楽舎）、『表現のたね』（モ・クシュラ）など著書多数。サウンドプロジェクト「S|Q/S|Q+|」のドラマーとして国内外のアートフェスに参加。大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員、博士（学術）。アウトプットは取っ散らかっているが、常に「表現でどんなヘンテコな世直しができるか」をテーマに活動中。

中﨑透〔美術家〕
1976年生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど形式を特定せずに展開している。展覧会多数。2006年より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年より水戸市内にて遊戯室（中﨑透＋遠藤水城）を設立し、運営に携わる。2011年より「プロジェクトFUKUSHIMA！」に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

編集後記

佐藤李青

東北の「記録の生態系」は、いま、どうなっているのだろうか。

これは明確な観測対象として世の中に存在するものではないし、震災以降に東北の地で生まれているように感じていた文化的な営みを、ひとつの集まりとして捉えるために仮に名づけてみたものだった。この「仮に」という言葉で現在に点を打つ方法は、大事な心構えとなった。

編集会議では、何度も「わからない」という台詞が飛び出した。それこそが変化するいまを捉えているのだと確認しながら、各地を歩き、人と出会い、その声に耳を傾けた。本号は、そうして採集した風景の記録でもある。

最後に、もう少しだけ、本号を契機に出会った風景を、ここに記しておきたい。

掲載原稿も、ほぼ出揃った2017年12月23日、せんだいメディアテーク（以下、メディアテーク）で開催された草アーカイブ会議2「コミュニティ・アーカイブってなに？」*1に参加した。主催者として甲斐賢治さんが冒頭に挨拶をし、松本篤さんがスピーカーとして登壇していた。タイトルにあった草アーカイブとは「プロ野球」と「草野球」を例に「誰もが関わることができる、ごく日常的な文化活動としてのアーカイブ」と説明された。メディアテークのアーカイブに対する態度を象徴する言葉だった。会場には一般の参加者に交じって、アーティストを始め、震災以降メディアテークの活動に関わった、さまざまな人が訪れていた。登壇者の議論に耳を傾けるだけではなく、その場で互いに何かを確かめるように集っているようにも見えた。

フォーラムの前にギャラリーターンアラウンドの工藤夏海個展『世の中グラデーション』*2に足を運んだ。ドローイング、スケッチ、版画、立体、切り紙、ZINE、人形劇の人形など雑多ともいえるほどの多様な表現は、ひとつの場に介することで、それらが工藤夏海という個人のもとで地続きの営みであることを浮かび上がらせていた。展覧会に併せて制作された作品集も同様だった。「工藤夏海というひとりの女性が、日々の生活という土の上に蒔いた小さな種の集まり」として編まれた本書は、地元の写真館で撮影した6歳のランドセルを背負った工藤の写真からはじまる。

これらの実践には同じようなまなざしがあるように思えた。同じ土地で暮らすからこそ地続きに見えてくる「私」の表現を「公」の場に掬い上げる。そのまなざしは個々のものとしての「作品」に焦点をあてるのではなく、複層的な個々人の文化的な営みに向けられている。そうしたまなざしを他者と共有するための「現れ」をつくるために、「アート」という領域で培われてきた技術が用いられていた。

そして、それらの実践を担う人々を思い浮かべたとき、甲斐さんが目指す先として語っていた大阪の過去の風景は、もしかしたら、こういう感じだったのではないだろうか、とふと思った。生態系とは、歩けるくらいの土地の範囲のなかで同時代の問題意識から生まれる実践の連鎖で立ち上がってくる視点なのかもしれない。仙台に限らず、本号に掲載した東北での実践は互いにまなざしを共鳴させながら、複数の人々の手が重なり合うようにして生まれていた。

その根底には「この土地で何ができるか」という問いがあった。それは2011年の震災の経験が育んだものだろう。だが、同時に見えてきたのは、いまの東北の風景をかたちづくる実践は「震災後の東北」に留まらない広がりをもつということだった。いつかの経験はいまを支え、どこかに届く可能性がある。

わたしたちには、東北に軸足を置きながら、ほかの場所と時間をつなぐメディア（媒介）としての役割が求められているように感じている。8年目、9年目、その先の10年目という節目に目を向けながら、いまも変化し続ける東北の地の観測を続けていきたいと思う。

*1　フォーラムは2日間開催。1日目（12月23日）のテーマは【提示・表現】―「痕跡とアクチュアリティ〜鉱山、通信所、終戦、ホーム〜」。スピーカーは小岩勉（写真家）、坂田太郎（サイト・イン・レジデンス）、瀬尾夏美（画家／作家）、松本篤、モデレーターとして桂英史（東京藝術大学大学院映像研究科教授）が登壇した。

*2　工藤夏海個展「世の中グラデーション」は2017年12月20日〜2018年1月14日に開催された。作品集『工藤夏海　世の中グラデーション』は制作・発行「世の中グラデーション」実行委員会（安部朝美、長内綾子、関本欣哉、高橋創一）。

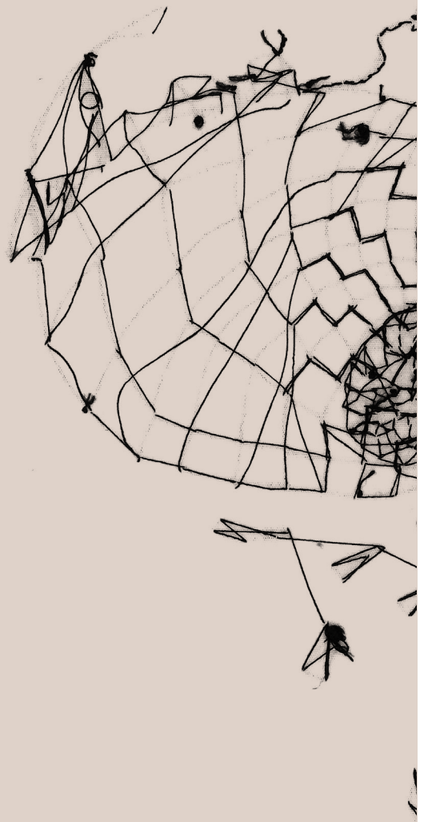
是恒さくら《この岸、かの岸》

素材：糸、布　（300mm×400mm）　2017年

是恒さくらさんが初めて牡鹿半島を訪れたのは、2015年春。東北芸術工科大学の復興支援の学生団体に同行した。「まだまだ復興が進んでいない」という声もあるなか、是恒さんは半島の野生の豊かさが印象に残ったという。木々が生い茂る森には鹿が住み、脅威を振るう海も平時は、さまざまな海産物を与えてくれる。震災を経てもなお同じ土地で暮らしを紡いでいこうとする人たちとも出会った。

今回の表紙は、ずっと昔から東北の沿岸部のあちこちで、人の暮らしが海とひと続きにあった風景を描いている。大きく広がる漁網は、海から糧を得る道具。網地島の精霊流しで見た提灯と、紀伊半島できいた「船のかたちの精霊流し」のイメージも入っている。

「海は遠く離れた土地と土地を結びつけ、この世を去った祖霊や家族が彼方にいる。海とは " いつか還っていく場所 " でもある」と語る。



Art Support Tohoku-Tokyo

Art Support Tohoku-Tokyo（ASTT）は、「東京緊急対策2011」の一環として開始した、東京都がアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）と共催し、東日本大震災の被災地域（岩手県、宮城県、福島県）のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。

都内で展開する「東京アートポイント計画」の手法を用いて、現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、地域の多様な文化環境の復興を支援。被災地域のコミュニティを再興するため、さまざまな分野の人々との交流プロセスを重視したアートプログラムや、その実施を支える仕組みづくりを行っています。

http://asttr.jp

東北の風景をきく

FIELD RECORDING

vol.01

特集 記録の生態系にふれる

Art Support Tohoku-Tokyo

編集長

佐藤李青（アーツカウンシル東京）

編集

川村庸子

嘉原妙（アーツカウンシル東京）

デザイン

内田あみか

反訳

薄木利晃（PHILOSYKOS Co.,Ltd）

印刷

株式会社山田写真製版所

監修

森司（アーツカウンシル東京）

発行

2018年2月2日　第1刷発行

2018年11月15日　第2刷発行

アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒102-0073

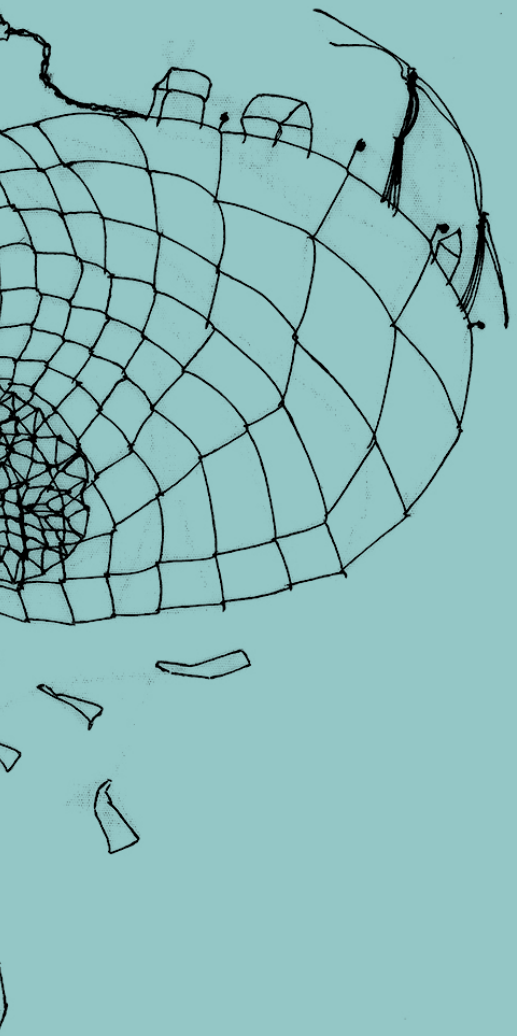
東京都千代田区九段北4丁目1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8435　FAX 03-6256-8829

https://www.artscouncil-tokyo.jp

©アーツカウンシル東京



ARTS COUNCIL TOKYO